

平成20年度 政策提言書



平成21年3月
浜松商工会議所青年部

◆ ご挨拶

本年度の政策提言は政令指定都市3年目を迎える浜松市が、激化する都市間競争を生き抜き、政令指定都市として日本を代表する都市へと成長発展を遂げる為は何をすべきかを青年経済人の視点から考えました。まずは、現状の浜松市の姿について調査・研究を行いました。いくつもの取り組むべき課題の中から検討を重ね2つのテーマに絞込みを行い、今年度の浜松商工会議所青年部の政策提言とさせていただきます。この提言が浜松をより良い方向に導き、地域の発展に寄与することをメンバー一同心より願っております。結びになりますが本提言書作成にあたりご支援ご協力を頂きました全ての皆様に感謝と御礼を申し上げご挨拶とさせていただきます。

浜松商工会議所青年部

会長 松坂直和

私たちは、原油や小麦の市場価格高騰やサブプライム融資制度破綻による金融市場の混乱、これに伴う突発的な円高などかつて経験したことのない経済局面を迎えております。こうした世界的大不況は、今後の経済界に対して大きな影を落としてきております。『いきすぎた合理性資本主義の負面性が表面化したもの』というマスコミ等の報道もありますが、政治局面として緊急財政出動等の景気対策や雇用対策等の抜本的改革が予定され、その方向性を見いだそうとしております。同様に浜松市においても、ブラジル人労働者の一斉帰郷に見られる人材雇用面など、大きな変化の兆しが次々と現れております。こうした経済局面の中で、個人の精神的な『癒し』や『豊かさ』を求める傾向が強くなってきていることを痛切に感じます。都市基盤構築において『豊かさ』という社会的要因を無視し政令指定都市として日本を代表する都市へと成長発展を遂げることは不可能です。今後より必要とされる生活の『豊かさ』の創出について今年度の政策提言はその方向性を導かんとしております。この提言書が地域の発展の一翼となり貢献できることを切望してやみません。この提言書作成にあたりましてご支援ご協力を頂きました各方面の皆様には感謝と御礼を申し上げますとともに、ご挨拶とさせていただきます。

政策提言委員会

担当副会長 高橋秀典

◆ 目次

平成 20 年度政策提言活動にあたって	1
“浜松”を知る	2
SWOT 分析結果	6
クロス分析結果	10
農から創るコミュニティ	
農から創るコミュニティ提言にあたり	13
第 1 章 学校教育から広がる輪	15
第 2 章 市民農園から広がる輪	19
第 3 章 市民農業大学から広がる輪	25
第 4 章 新しい流通から広がる輪	29
第 5 章 農の底力から広がる輪	35
浜松 YEG 版コンパクトシティ	
浜松 YEG 版コンパクトシティ提言にあたり	42
第 1 章 文化が繋がる和	47
第 2 章 人が繋がる和	49
第 3 章 心が繋がる和	52
第 4 章 歴史が繋がる和	55
あとがき	59
資料・参考文献等	

◆ 平成 20 年度政策提言活動にあたって

商工会議所青年部は、綱領や指針で、地域のリーダーであることを自覚し、地域のため、社会のために創造力と行動力をもって貢献しようと謳っています。そして、当青年部は、昭和 60 年 12 月の創立時より毎年、政策提言を委員会活動として行い、豊かで住みよい郷土づくりに寄与せんと活動を進めてきました。

さて、平成 20 年度の政策提言活動をより円滑に進めていくにあたって、商工会議所青年部だからこそその政策提言とはという明確な基準を設け、と同時に商工会議所青年部の役割を確認し、委員会活動に取り組んでまいりました。

【商工会議所青年部（青年経済人）だからこそその“政策提言”とは】

- (1) 自分たちの主張を書いた提言書を実際の政策に反映させるために意思決定者《すべての社会生活を営む者》に働きかけることであり、その内容は、政策案であることと同時に世論を喚起できる“インパクト”があるもの。
- (2) 現実を踏まえ施策を織り込んで“夢”を紡ぐもの。
- (3) それぞれの青年部会員企業の社会的役割と使命を土台に、商工業発展を軸に市民生活の“より一層の向上”を求めたもの。

【浜松商工会議所青年部の役割とは】

為政者等行政を実際に主導する組織の方々には、社会的にみて高度な見識を持ち、経済的にも優れた人たちが、すなわち成熟経済人である。

しかしながら、浜松を主に形成する社会参加主体は、あくまでも一般市民であって、一般市民の声や行動なくして、力強い「まちの活力」は生み出せない。

だからこそ、その成熟経済人と一般市民との間に位置してはいるものの実際には、一般市民に近い存在である青年経済人たる浜松商工会議所青年部が、成熟経済人の想いと一般市民の想いを融合させた、市民目線での浜松の夢（ビジョン）作りのお手伝いを、推し進め発展させる役割を担うのではないのでしょうか。

以上の明確な基準と役割を前提に、地域の経済的発展の支えとなるべき青年経済人として、どんなことに寄与しているのか、そしてどんなことに貢献できているかを考えながら、浜松をより良くするための“次代へのメッセージ”を検討してきました。その成果として、提案や意見を提言書にまとめました。この“次代へのメッセージ”が、より豊かで住みよい郷土づくりに役立つものと確信致しております。

平成 21 年 3 月 吉日
浜松商工会議所青年部
政策提言委員会

委員長 徳田嘉彦

◆ “浜松”を知る

わがまち “浜松”

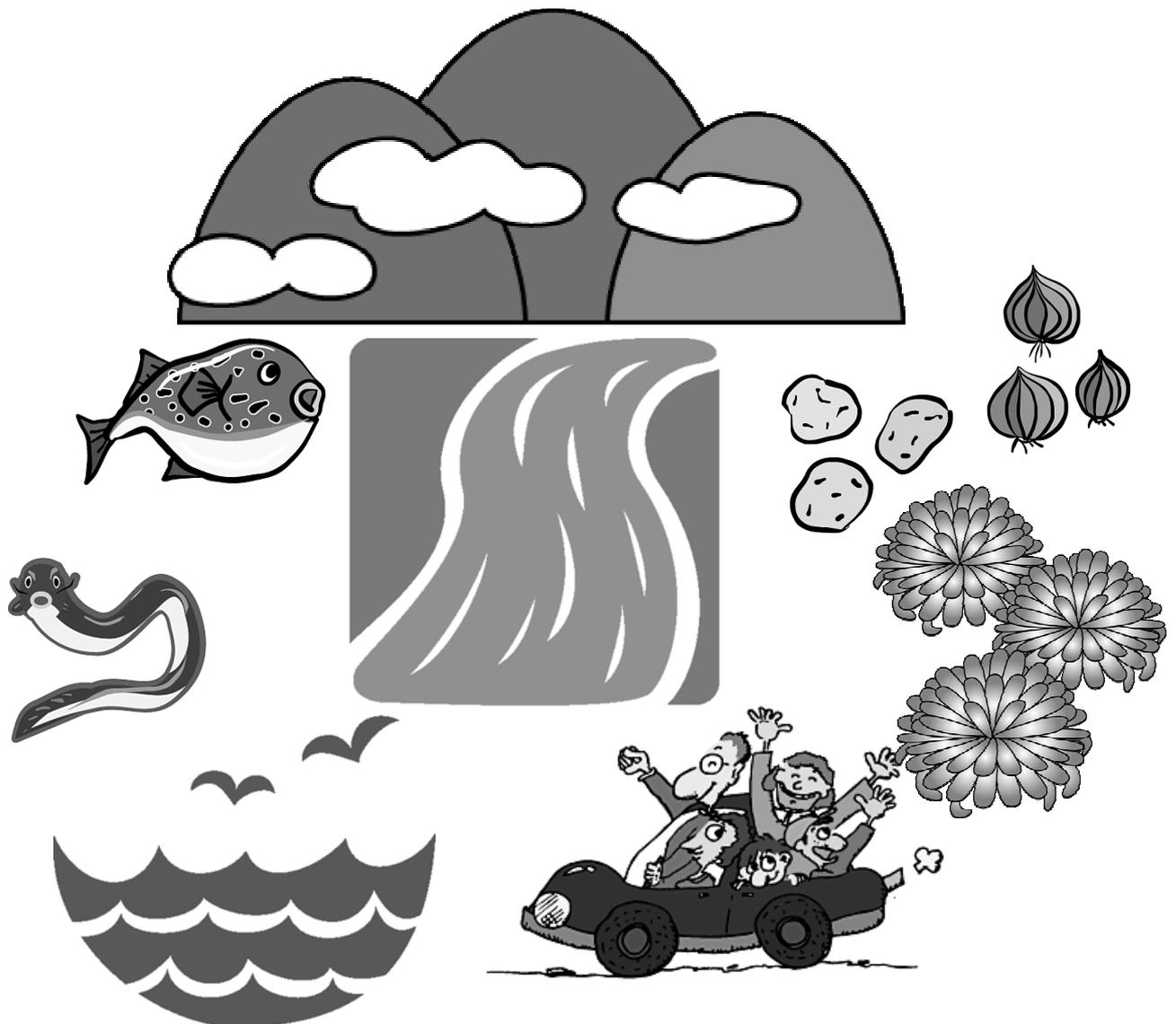
北部は赤石山系、東部は全国でも有数の流域を持つ天竜川、南部は広大な砂丘からなる遠州灘、そして西部は浜名湖と四方を異なる豊かな自然に囲まれ、気候は温暖。

オートバイ・楽器・繊維・光技術の分野で国際企業を輩出する工業都市。

全国1位の産出額を誇るチンゲンサイ・セロリをはじめとする野菜や全国屈指の菊の産地でもある花卉の農業都市。

特産品としても有名なウナギ・天然トラフグ・スッポンやハモなどをはじめとする水産物を有する漁業都市。

これだけを取ってみても、多岐にわたって恵まれた都市 “浜松”
そこに住み生活する私たちは、
どれほど “浜松” の魅力を理解しているのだろうか？
また、その魅力を生かしているのだろうか？
そんな疑問から出発したのが、今年度の政策提言委員会の出発点です。



浜松をより良くしていくためには、浜松の姿を知らなければならない！

そこで、まず環境分析（SWOT 分析）を行うことによって、今年度の政策提言のスタートを切ることとしました。

1、SWOT（スウォット）分析とは

SWOT 分析とは、1960 年代に考案された、「企業の環境」を分析する手法。

SWOT は、以下の 4 つの頭文字を取った言葉。

Strength	強み
Weakness	弱み
Opportunity	機会
Threat	脅威

SWOT 分析では、企業の内外にある様々な要素を、内部環境と外部環境に分けることが重要。

内部環境	企業自らがコントロールし得る範囲の環境
外部環境	企業自らがコントロールできない範囲の環境

2、SWOT 分析を用いた理由

(1) 既成の浜松市の SWOT 分析への疑問

- i) 環境分析の段階で、SWOT そのものを出しきれていないのではないか
- ii) O（機会）に抽象的なもの（トレンドとニーズ）しか挙げられていない
- iii) T（脅威）に都市間競争を挙げているが、その位置付けが不明確
 - そもそも都市間競争とは何なのか？
 - 何の競争なのか？
 - なぜ勝たなければいけないのか？
 - どこに勝たなければいけないのか？
- iv) 何と何がクロスされて戦略が立ち上がっているのか不明確
- v) S（強み）W（弱み）がほぼそのまま戦略になっており、クロス分析のダイナミズムが感じられない
- vi) はじめから決まっている戦略に合わせて、「逆算して」SWOT を作っていないか
- vii) 選択と集中ができていないか（結果的に「何でもやります」になっていないか）

(2) 環境分析の作業＝政策提言のスタートとして有意義

(3) 強みを活かそうという発想＝政策提言にとって新しい切り口に

(4) グループ作業に向く

(5) 元々が経営の手法＝異業種交流の本領発揮

3、今回行う SWOT 分析の前提条件

前提条件 1 何をもって、「内部」・「外部」を判断するのか？

浜松市役所の「内部」・「外部」ではなく、行政区の「内部」・「外部」とする

行政区内部になる資源は「内部」とする

一方、行政区内部で生じていることでも、コントロールできないことは「外部」とする

(例) 日本 3 大砂丘の中田島砂丘がある = 強み (S)

地球温暖化による海岸線の侵食 = 脅威 (T)

前提条件 2 何をもって、強いとか弱いとか判断するのか？

よその市町村と比べて、「相対的に」とする

前提条件 3 取り方によって判断が分れるのでは？

同じことでも、人によって評価が「逆」になり、強みと弱み、機会と脅威は入れ替わることがあります

(例) 高齢者の増加…取り方によって機会にも脅威にも

その場合には、両方に記入する

前提条件 4 「市民のニーズ」の取扱いは？

市民はお客さんとする

(例) 市民のニーズが高まっている = 機会 (O)

市民のニーズが低い = 脅威 (T)

但し、これについては、細かいものまで列挙すると訳が分からなくなるので、絞り込んで検討する

(例) 隣の犬がうるさいから何とかして欲しい

4、SWOT 分析のできること

(1) 企業環境の可視化

企業環境を整理して一覧化することで、改めて企業を見つめ直すことに

「敵を知り、己を知れば、百戦危うからず」 孫子の兵法より

(2) 経営戦略の導出

SWOT を下記のような表に当てはめ「クロス分析」をすることで、戦略を立てられます

	強み (S)	弱み (W)
機会 (O)	機会 (O) × 強み (S) ⇒ 成長戦略 強みを発揮して 機会を活かす	機会 (O) × 弱み (W) ⇒ 改善戦略 弱みを克服して 機会を逃さない
脅威 (T)	脅威 (T) × 強み (S) ⇒ 回避戦略 強みに基づいて 脅威に対処する	脅威 (T) × 弱み (W) ⇒ 撤退戦略 弱みと脅威を最小化して リスクを回避する

5、環境分析からクロス分析に進むために踏まえるべき点について

～企業と違って～

(1) 競合が不明確である

⇒ そもそも都市間競争に捉われない

(2) 内部と外部の境界線がどうしても不明確かつ多次元である

⇒ 両方に記入

(3) 地方公共団体は営利企業ではない

⇒ YEG も営利団体ではない

⇒ 一人の浜松人として考える

(4) 資源配分が複雑である

⇒

(5) 意思決定がトップダウンではない

⇒ SWOT のウェイト付けが決まらない

⇒ いったん度外視する

6、 SWOT 分析の結果

内部要因分析 ～S（強み）～	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 浜松祭りがある ・ 出世城「浜松城」がある ・ 戦国時代の歴史がある ・ 浜松餃子がうまい ・ ラブホテルが多い ・ 温暖な気候 ・ 気候が安定している（温暖） ・ 自然が豊か（観光資源・食） ・ 雪があまり降らない ・ 観光資源が多い（海・山・川・湖） ・ 浜名湖がある ・ 豊富なサーフポイント ・ 日本3大砂丘の中田島砂丘がある ・ 浜名湖・遠州灘・天竜川の豊かでバリエーションに富んだ水産資源 ・ 佐鳴湖がある ・ 水が豊富 ・ 天竜川水系により渇水に強い ・ 産業観光に優れている ・ うなぎの産地である ・ すっぽんの産地である ・ しらすの産地である ・ ふぐの産地である ・ 鱧の産地である ・ 潮干狩りができる ・ 海がめの産卵地 ・ 海と山の共存 ・ 農産物が豊か ・ 農業生産が多い ・ 三ヶ日みかんの産地 ・ みかん・メロン・次郎柿等の農産物 ・ 菊・ガーベラ等の花卉類 ・ ガーベラ産出額全国1位 ・ セロリ産出額全国1位 ・ チンゲンサイ産出額全国1位 ・ 玉葱早期出荷全国1位 ・ エシャロット産出額全国1位 ・ 地産地消の推進 ・ 豊かな山林 ・ 日本3大美林に挙げられる天竜杉 ・ 1,000Km²に及ぶ北遠森林の存在 	<ul style="list-style-type: none"> ・ アクトタワーがある ・ ゴルフ場が多い ・ オートバイ発祥の地 ・ 多くの製造業の発祥地 ・ 産業が栄えている ・ 世界型（グローバル）企業の拠点になっている ・ 元気な（上場）会社が存在する（本社機能） ・ 大きな工場（企業）がある ・ 百年以上の企業数が多い ・ ものづくりの集積 ・ ネットショップオーナーが多い ・ 比較的フレンドリーな人柄（浜松人） ・ 日本の中心（に近い） ・ 面積が広い ・ 平野部の面積が大きい ・ 500Km²に及ぶ可住平坦地の存在 ・ 広大な放棄農地の存在 ・ 郊外が発達している ・ 大型医療機関に恵まれている ・ 交通利便が良い（東海道） ・ 東京・大阪 日帰り可能 ・ 整備された道路 ・ 東西交通はGood ・ 高速道路が通っている ・ I・Cが3つある ・ バス路線網は日本有数 ・ 新幹線が止まる ・ スキー日帰り可能 ・ 国際基準のプール（ができる） ・ 大型の公園が多い ・ 国際的である ・ 外国人が増えている ・ 人口が増えている ・ 自衛隊がある（安定した雇用を創出している） ・ 市民交響楽団（浜響）がある ・ 駅前のプロムナードコンサートは24年の歴史 ・ 政令指定都市である ・ 静大理工学部<テレビの発明 ・ 浜松ホトニクス<世界一の光センサ ・ 浜松医科大学 ・ 地元金融機関の安定した健全な経営

内部要因分析 ～W（弱み）～

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 川の汚れがひどい ・ 浜名湖・佐鳴湖の汚染 ・ 浜名湖の生態系の変化 ・ 外国人が多い ・ 大学生（若者）が少ない ・ 子供の減少 ・ 市街地人口が少ない ・ 中心市街地に活力がない ・ 街中のショップがさびしい ・ おしゃれな店が少ない ・ 百貨店が少ない ・ 飲み屋街が狭い ・ 飲み屋が高い ・ 街中の駐車場が高い ・ 所得額が多くない ・ 地域内格差の拡大 ・ 過疎化の進む山間部 ・ 山林や里山の荒廃 ・ 農地の減少と放棄農地の増加 ・ 農家の高齢化と後継者不足 ・ 農産地なのに地元では認知不足 ・ 農林水産業の衰退 ・ 養鰻業の衰退 ・ 織物産業の衰退 ・ 観光業の衰退 ・ 企業が離れている ・ 企業誘致が進んでいない ・ 大企業の支店が少ない ・ 頭脳産業の集積が少ない ・ 3次産業がもうひとつ ・ ものづくり意識の衰退 ・ 公共施設の使用料が高い ・ 公共交通機関が弱い | <ul style="list-style-type: none"> ・ 道路網の未整備 ・ 南北のアクセスが悪い ・ バスの本数が少ない ・ 地下鉄がない ・ 海に面している政令市なのに、商業用港がない ・ 四方を湖・川・山・海で囲まれている ・ 館山寺までの交通が不便 ・ 公共交通分担率が低い ・ 空港が近くにない ・ 車社会の拡大 ・ 自動車での移動が増加している ・ 治安（交通事故含む）が低下している ・ 交通事故が多い ・ 交通マナーが悪い（携帯電話の使用） ・ 地域コミュニティの崩壊 ・ 倫理観の欠如 ・ 危機感の欠如 ・ 観光スポットが少ない ・ 外国人旅行客が少ない ・ 古いものを大切にできなかった ・ 文化振興が進んでいない ・ 伝統文化継承の衰退 ・ 音楽の都という市民の意識は低い ・ 姉妹都市（キャマス市他）を知らない ・ 音楽友好都市（ワルジャワ市）誰も知らない ・ プロ野球・プロサッカーチームがない ・ ゴルフ場が高い ・ 公園が少ない ・ 都市ビジョンの欠如 ・ 領有面積が日本屈指 ・ 区割りが多すぎた ・ 合併後の浜松の一体感の欠如 ・ 自衛隊がある |
|--|--|

外部環境分析 ～0（機会）～

- ・ 地方の時代
- ・ 大丸の出店
- ・ 元気な老人の増加
- ・ 健康志向の高まり
- ・ 食の安全に対する意識の高まり
- ・ 地球環境保全意識の高まり
- ・ エコバックの普及
- ・ 開発できる土地がまだある
- ・ 平地が広く発展の余地が大きく残っている
- ・ 平面交差の増加の流れ（ユニバーサルデザインのニーズ）
- ・ 浜名湖横断道路ができるかも
- ・ 三遠南信道の整備
- ・ 静岡空港の開港
- ・ 国道1号が街中を通っていない
- ・ 市営駐車場の高さが低い（車高が高い車が増えてきたということ？）
- ・ 市域が広がったということ
- ・ 役所が点在していて面倒くさい（なんとかしてほしいというニーズ）
- ・ 町単位の祭りが熱い
- ・ 地域ブランドの時代
- ・ 特産品ブーム
- ・ 技術（知財）が高く評価されている
- ・ 世界に誇れる技術力がある
- ・ インターネット媒体の増加
- ・ 携帯電話の普及
- ・ 外国人の増加
- ・ 外国人が3万人以上在住
- ・ 自己防衛意識の高まり
- ・ 安全な釣り場が少ないということ
- ・ 海上釣堀がない
- ・ アクタタワーの利用を高める余地がまだある
- ・ 雪が降らないということ
- ・ 農業にとって 気候が良いということ
- ・ 農業にとって 天竜川流域は土地が肥えているということ
- ・ グリーン・ツーリズムの気運
- ・ 地産地消の機運
- ・ 冬場の風が強い
- ・ 官の政策に頼らないという意識の高まり
- ・ 行革に注目が集まってきている
- ・ 政令指定都市への移行メリットの発揮
- ・ モザイカルチャーのイベント
- ・ 商工会議所青年部



外部環境分析 ～T（脅威）～

- ・ 海岸・砂丘の侵食
- ・ 浜名湖や佐鳴湖の汚染進行
- ・ 水環境の悪化
- ・ 緑地の減少
- ・ 生態系の破壊
- ・ 杉と花粉症
- ・ アレルギー疾患の増加
- ・ 地球温暖化
- ・ エネルギーの低自給率
- ・ ガソリン（石油製品）の高騰
- ・ 中国の大気汚染
- ・ 中国の成長による食糧危機
- ・ バイオ燃料化による食糧危機
- ・ しらすうなぎが獲れなくなった
- ・ 東海大地震
- ・ 防災対策が弱い
- ・ 過疎地の切捨て
- ・ 中山間地域との格差問題がある
- ・ 市街化調整区域が広い
- ・ 農業休耕地が増えている
- ・ 大都市に挟まれている
- ・ 静岡空港の位置が中途半端
- ・ 道路はいらないという気運
- ・ 北（長野）へのアクセスが未整備
- ・ 第二東名凍結
- ・ 館山寺への海からのアクセスがない
- ・ 広い市域
- ・ 車での移動が多いこと通勤時の渋滞
- ・ 交通死亡事故の増加（政令市 No 1）
- ・ 公共施設の駐車場が狭い
- ・ 郊外に大型店舗が林立
- ・ 流通業は県外資本の進出で地元出身企業が減少
- ・ 大規模ショッピングモール進出で小売店倒産、街中空洞化
- ・ 市外からの市場価格破壊
- ・ 集合住宅（マンション）の乱建
- ・ 大手企業の移転（市外・国外）
- ・ 地域間競争力の低下（交通・企業の移転で）
- ・ 経済不安
- ・ ものづくりの後継者難
- ・ パソコンの普及率のアップ
- ・ パソコンプログラマー、システムエンジニアが不足
- ・ 市民の高齢化
- ・ 高齢者医療費の負担増
- ・ 生活習慣病の増加
- ・ 少子高齢化
- ・ 人口の減少
- ・ 生産人口の減少
- ・ ニートやフリーターの増加
- ・ 都市圏への人口の集中
- ・ 外国人が多い
- ・ 治安の低下（外国人の増加）
- ・ 中心部風紀の悪化
- ・ 中学生がタバコを吸う
- ・ 若年層のモラルの低下
- ・ 近所づきあいの希薄化
- ・ 教育レベルの低下
- ・ 観光地としての知名度が低い
- ・ アピール不足
- ・ 地元意識が希薄
- ・ 大学の点在
- ・ 大增税
- ・ 市の借金が多い
- ・ 新浜松市合併による財政危機
- ・ 行き過ぎたグローバリズム
- ・ ソープランドがない

7、クロス分析の結果

内部要因分析 ～S (強み)～		内部要因分析 ～W (弱み)～	
【 強み (S) × 機会 (O) ⇒ 成長戦略 】		【 弱み (W) × 機会 (O) ⇒ 改善戦略 】	
強み (S) 500Km ² に及ぶ可住平坦地の存在		弱み (W) 車社会の拡大	⇒ コンパクトタウンの推進
強み (S) 交通利便が良い	⇒ 浜松への分都	弱み (W) ショップが寂しい	
機会 (O) 地方の時代		機会 (O) 老人の増加	弱み (W) 車社会の拡大
機会 (O) 静岡空港の開港	強み (S) 郊外が発達している	弱み (W) 自動車での移動が増加している	
強み (S) 役所が点在していて面倒くさい	⇒ 郊外のショッピングセンターの内に役所を入れる	弱み (W) 交通事故が多い	⇒ 公共交通分担率の向上
強み (S) 農産物が豊か	⇒ 地域内自給率の向上	機会 (O) 地球環境保全意識の高まり	⇒ 公共交通機関の強化
強み (S) 浜名湖・遠州灘・天竜川の豊かでバリエーションに富んだ水産資源		弱み (W) 公共交通機関が弱い	
機会 (O) 健康志向の高まり	⇒ 健康食材としてのアピール	弱み (W) バスの本数が少ない	⇒ 公共交通機関の強化
機会 (O) 食の安全に対する意識の高まり	⇒ 町おこし 無農薬ギョーザ	弱み (W) 地下鉄がない	
機会 (O) 特産品ブーム	⇒ 健康食材としてのアピール	機会 (O) 地域が広がったということ	⇒ 寄席を作るなど大人の遊べる街を作る
強み (S) 浜松餃子がうまい		弱み (W) 中心市街地に活力がない	
機会 (O) 健康志向の高まり	⇒ 町おこし 無農薬ギョーザ	弱み (W) 街中のショップがさびしい	⇒ 寄席を作るなど大人の遊べる街を作る
機会 (O) 食の安全に対する意識の高まり	⇒ 健康食材としてのアピール	機会 (O) 元気な老人の増加	
機会 (O) 地域ブランドの時代	⇒ 健康食材としてのアピール	機会 (O) 健康志向の高まり	⇒ 市民農園の拡大・推奨 企業に放棄農地の解放
強み (S) 特産品 (食に関するもの)		弱み (W) 農地の減少と放棄農地の増加	
機会 (O) 健康志向の高まり	⇒ 健康食材としてのアピール	弱み (W) 農家の高齢化と後継者不足	⇒ 市民農園の拡大・推奨 企業に放棄農地の解放
強み (S) 浜名湖・遠州灘・天竜川の豊かでバリエーションに富んだ水産資源	⇒ いろいろなものを地域ブランド品として拡販する	機会 (O) 健康志向の高まり	
強み (S) 農産物が豊か	⇒ いろいろなものを地域ブランド品として拡販する	機会 (O) 食の安全に対する意識の高まり	⇒ 開拓移民を受け入れる
機会 (O) 特産品ブーム		弱み (W) 遊休地が多い	
機会 (O) 交通利便が良い (東海道)	⇒ グリーン・ツーリズム浜松版創出	機会 (O) 農業にとって 気候が良いということ	⇒ 開拓移民を受け入れる
強み (S) 農産物が豊か	⇒ グリーン・ツーリズム浜松版創出	弱み (W) 姉妹都市 (キヤマス市他) 誰も知らない	
機会 (O) グリーン・ツーリズムの気運	⇒ 観光PR	弱み (W) 音楽友好都市 (ワルシャワ市) 誰も知らない	⇒ 日伯 (ブラジル) 親善の推進
強み (S) 出世城「浜松城」がある		機会 (O) 外国人の増加	
強み (S) 日本3大砂丘の中田島砂丘がある	⇒ 観光PR	機会 (O) 外国人の増加	⇒ 日伯 (ブラジル) 親善の推進
強み (S) 観光資源が多い (海・山・川・湖)		機会 (O) 外国人が3万人以上在住	
機会 (O) 静岡空港の開港	⇒ 水に関するスポーツ大会の誘致	機会 (O) 地産地消の機運	⇒ 開拓移民を受け入れる
機会 (O) モザイカルチャーのイベント		弱み (W) 遊休地が多い	
強み (S) 水に関する自然が豊富	⇒ 水に関するスポーツ大会の誘致	機会 (O) 農業にとって 気候が良いということ	⇒ 開拓移民を受け入れる
機会 (O) 健康志向の高まり	⇒ 経済特区?にする より外国人が集まる街にする	弱み (W) 姉妹都市 (キヤマス市他) 誰も知らない	
強み (S) 世界型 (グローバル) 企業の拠点になっている	⇒ 経済特区?にする より外国人が集まる街にする	弱み (W) 音楽友好都市 (ワルシャワ市) 誰も知らない	⇒ 日伯 (ブラジル) 親善の推進
機会 (O) 外国人の増加	⇒ 経済特区?にする より外国人が集まる街にする	機会 (O) 外国人の増加	
機会 (O) 外国人が3万人以上在住	【 強み (S) × 脅威 (T) ⇒ 回避戦略 】	機会 (O) 外国人が3万人以上在住	【 弱み (W) × 脅威 (T) ⇒ 撤退戦略 】
強み (S) 多くの製造業の発祥地		⇒ eco cityを目指す 電気自動車を普及する	
脅威 (T) 地球温暖化	⇒ eco cityを目指す 電気自動車を普及する	弱み (W) 佐鳴湖の汚染	⇒ 佐鳴湖埋め立て・埋め立て地の開発
脅威 (T) ガソリンの高騰	⇒ バイオエネルギー	脅威 (T) 水環境の悪化	
強み (S) 豊かな山林	⇒ バイオエネルギー	脅威 (T) 生態系の破壊	⇒ 観光都市としての立ち位置を切り捨てる
脅威 (T) エネルギーの低自給率	⇒ 外国人を農業生産労働者として活用する	弱み (W) 観光スポットが少ない	
脅威 (T) 工業廃材	⇒ 外国人を農業生産労働者として活用する	脅威 (T) 観光地としての知名度が低い	⇒ マイカー制限
強み (S) 外国人が増えている	⇒ 外国人を農業生産労働者として活用する	脅威 (T) アピール不足	
脅威 (T) 農業休耕地が増えている	⇒ 外国人を農業生産労働者として活用する	弱み (W) 交通事故が多い	⇒ 大型ショッピングモールを街中に作る
強み (S) 外国人が増えている	⇒ 外国人技術者を増やす	弱み (W) 交通マナーが悪い	
強み (S) 国際的である	⇒ 外国人技術者を増やす	脅威 (T) ガソリンの高騰	⇒ 大型ショッピングモールを街中に作る
脅威 (T) 人口の減少	⇒ 道州制になった後の州都を目指す	脅威 (T) 地球温暖化	
脅威 (T) 外国人が多い	⇒ 道州制になった後の州都を目指す	脅威 (T) 通勤時の渋滞	⇒ 大型ショッピングモールを街中に作る
強み (S) ネットショップオーナーが多い	⇒ ネットショップ特区を作って、SE等を集積する	脅威 (T) 交通死亡事故の増加 (政令市No1)	
脅威 (T) パソコンの普及率のアップ	⇒ ネットショップ特区を作って、SE等を集積する	弱み (W) 市街地人口が少ない	⇒ 大型ショッピングモールを街中に作る
脅威 (T) パソコンプログラマー・システムエンジニアが不足	⇒ ネットショップ特区を作って、SE等を集積する	弱み (W) 中心市街地に活力がない	
強み (S) 交通利便が良い	⇒ 道州制になった後の州都を目指す	弱み (W) 街中のショップがさびしい	⇒ 大型ショッピングモールを街中に作る
脅威 (T) 大企業の支店が少ない	⇒ プロ野球・プロサッカーチームのキャンプ誘致	弱み (W) おしゃれな店が少ない	
強み (S) 平野部の面積が大きい	⇒ プロ野球・プロサッカーチームのキャンプ誘致	弱み (W) 街中の駐車場が高い	⇒ プロ野球・プロサッカーチームのキャンプ誘致
強み (S) 温暖な気候	⇒ プロ野球・プロサッカーチームのキャンプ誘致	脅威 (T) 大規模ショッピングモール進出で小売店倒産・街中空洞化	
強み (S) 交通利便が良い (東海道)	⇒ プロ野球・プロサッカーチームのキャンプ誘致		
脅威 (T) プロ野球・プロサッカーチームがない			

外部環境分析 (機会)

外部環境分析 (脅威)

8、今年度掘り下げるテーマ

以上の SWOT 分析及びクロス分析の結果を踏まえ、数ある取り上げるに値する候補の中から今年度のテーマとして選択したものが、《農から創るコミュニティ》と《浜松 YEG 版コンパクトシティ》です。

中国製餃子による食中毒問題や消費期限偽装問題・原産地偽装問題などの食に関する社会問題が、世間を騒がせ、食の安全や安心に対する意識が高まる中、浜松には“農に関するたからもの”に恵まれていることを今回の環境分析が気づかせてくれました。その農を中心におき、新たな「まちの活力」を探ってみようというのが、

《農から創るコミュニティ》であり、

平成の大合併により、地域内格差が拡大し、過疎化が進み、その結果地域コミュニティの崩壊や地域固有の伝統文化が衰退を招いているといわれている中、浜松には“住環境に関するたからもの”に恵まれていることを今回の環境分析が気づかせてくれました。その住環境を中心におき、新たな「まちの活力」を探ってみようというのが、
《浜松 YEG 版コンパクトシティ》です。

これより順に具体的提言について、説明させていただきます。





農から創るコミュニティ

◆ 農から創るコミュニティ 提言にあたり

1. 着眼点 ～農は浜松の宝物～

昨今、食に関する話題が、新聞紙上に上がらない日はありません。食の安心・安全に対する人々の関心が急速に高まっています。また、世界的な気候変動・人口増加・投機等を背景として、まさに世界的な食料危機という問題が、わが国にも迫りつつあります。ここにおいて、もはや国家的課題として、農業の再生が叫ばれ始めました。

この中であって、わが浜松市は全国有数の農業生産（平成17年農業産出額全国5位）を上げている農業の盛んな都市です。温暖な気候、都市部との隣接、交通網の整備等、農業にとっての好条件もそろっています。

さらに浜松市には、果樹ではみかん、野菜ではセルリー、チンゲンサイ等、全国に聞こえた名産品がいくつも存在します。名産品を発掘し、それを軸とした「まち興し」に取り組もうとしている市町村も数多ある中で、なんと浜松は恵まれていることでしょうか。

今回、私達は浜松市の未来を考える上で、浜松市の「農」に着目しました。

産業としての「農業」そのものを捉えることに留まらず、そこから広がる多様な事柄を捉えたいことから、あえて「農」ということばを用います。

農を浜松市の「身近な宝物」と考えること。ここから発想していきます。

2. 踏まえるべき課題 ～農の豊かさと農業の現状～

私達は、「農」から発想して、豊かな浜松市の未来を考えていきます。その上で、まず念頭に置きたいことは、農の豊かさの本質です。

例えば、農地ということの一つとってみても、農産物の生産の場ということに留まらず、農地は緑の空間として、ヒートアイランド現象の緩和や貯水の機能を果たしています。都市から訪れる人には癒しを与えることもあるでしょう。また、活用の仕方によっては、災害時の避難場所になることもありますし、環境教育や農業体験の場としても、多くの人々に関わってくる可能性を持っています。このように、農の豊かさは非常に多面的です。

また、農の豊かさには、「体験してみてもこそ」実感できることがあります。私達の中にも多くの体験者がいるのですが、実感できることは、第一に、人の命を支える食を生み出すという「農の力」そのものです。

そしてもうひとつ、農には人を幸せにする「特別な力」があるのだということです。親子の交流が生まれた。生きがいがあった。手作りの野菜を交換し合った（最高の贈り物でしょう）。友達ができた。

これも人によって様々です。

こうした豊かさを守り、もっと市民の間で分かち合っていけたらと、私達は考えます。

しかし、ここで忘れてはならないことは、農を生業としている農業者の方々は、現在大変困難な状況に直面しているということです。

近年の農産物価格の低迷、原油価格の高騰等、農業経営には大変な逆風が吹いており、農業経営は厳しさを増しています。

日本の農業経営にとって最も大きい問題は、生計を維持していくのが困難であり、後継者がいないまま、農業従事者が高齢化しているということです。

わが浜松市においても、この問題は決して例外でなく、平成12年から17年にかけて、専業農家が578戸（1%）、兼業農家が1928戸（23%）減少しています。また、耕作放棄地面積も同期間で82ha増加しているという状況にあります。

私達はこうした問題を踏まえて、提言を行なうこととします。

「農」の持つ可能性から広がる浜松市の未来を論じていくためにも、現在の農業者の問題を、農業者だけの問題とせず、市民と関わりの中で考えていきたいと考えます。

3. 5つの柱 ～広がる輪～

私達は以下の5つの柱を立てて、「農から創るコミュニティ」を提言します。

- ① 学校教育から広がる輪
- ② 市民農園から広がる輪
- ③ 市民農業大学から広がる輪
- ④ 新しい流通から広がる輪
- ⑤ 農の底力から広がる輪

共通するキーワードは「広がる輪」であり、それぞれの提言は相互に関連しています。

浜松の身近な宝物である「農」を守り、その豊かさをもっと暮らしの中に活かしていきたい。そのためには、農の豊かさを軸としたコミュニティ、すなわち「人の輪」を政策的に創り出し、この輪を広げていくことで、農業者の構造的な問題も含めて、さまざまな問題を「目的合理的」に解消していきたい。

これが本提言書の意図するところではあります。

提言1 農から創るコミュニティ

第1章 学校教育から広がる輪

農の豊かさである、人の命を支える食を生み出すという農の力そのものに幼少の頃から実際に触れることの重要性を提言したい。具体的には、浜松市独自の小中学校における「農」科目の創設について提言します。

1. 食育に関する取り組みの現状

「農」を中心としたコミュニケーションを考えたとき、まず浮かぶのが「=食」という点です。

そして家庭で食卓を囲む場面は誰もが体験したことのある一番身近な、そして一番強く影響があるコミュニケーションの場ではないでしょうか。しかしながら、昨今この機会が減少し、「人」が生きていく為の根幹である「食」に関する基本的な教育がされず、食に対する考え方の偏りや感謝の気持ちが希薄化し、強いては自分の生まれ育った地方の食文化も知らずにいることが顕著になっている傾向は、浜松市が平成20年3月に策定した「食育推進計画」に述べられている通りです。

この計画の中で視点となっている「こころと体の健康づくり」「地産地消」「食の安全」は、まさに子どもが考える「コミュニティ」の核となる点であります。また、個人の「食」に関する意識、知識、そして基本的な食生活の形成が小学校入学前であることを踏まえ、この計画の対象が幼稚園、保育園にまで及んでいることは非常に意義のあることと思われまます。

この計画の中では、家庭が中心となり、「学校」「地域社会」が連携・協力し合い、それを行政が支援する図式となっております。そして、教育現場における「食育」の推進として、「給食をはじめとする食事の場、また食事の場以外において具体的な取り組みを行う」と計画されております。

しかしながら、この具体的な取り組みは、子どもが調査した限り、データの収集、取りまとめ、情報の提供にとどまっており、何処まで成果を挙げているのか、また計画が目指すところに果たして目標の達成が可能なのかといった疑問が浮かびます。この計画が平成17年7月に制定された「食育基本法」の方針に基づき、それまで浜松市の各課において進められていたものをただ取りまとめて数値化し、一定の数値目標を示しただけの感じがいたします。

2. 学校教育の現状

食育の実践的な現場といたしまして、小中学校ではどのような取り組みがなされているか、所管である教育委員会でお話を伺い、調査いたしました。すると現在の小中学校での「食」に関する教育については、文部科学省よりの通達であります「食に関する指導の手引き」において定められており、その中の「指導の全体計画」に沿った形で進められているとの事でした。

その文部科学省の「食に関する指導の手引き」の中では、その相対的な目標として、

- i) 食事の重要性、食事の喜び、楽しさを理解する。
- ii) 心身の成長や健康の保持増進の上で望ましい栄養や食事の取り方を理解し、自ら管理していく能力を身につける。
- iii) 正しい知識・情報に基づいて、食物の品質及び安全性について自ら判断できる能力を身につける。
- iv) 食物を大事にし、食物の生産等にかかわる人々へ感謝する心をもつ。
- v) 食事のマナーや食事を通じた人間関係形成能力を身に付ける。
- vi) 各地域の生産、食文化や食にかかわる歴史等を理解し尊重する心をもつ。

といったものが掲げられております。

さらに具体的な方針といたしまして、「学級活動及び給食時間」の項目で

小学校の低学年 …………… 給食を知ろう」「食べ物に関心を持とう」
中学年 …………… 「食べ物の働きを知ろう」「食生活を見直そう」
高学年 …………… 「食べ物の働きについて知ろう」「食生活について考えよう」

といった形で指導項目が設定されております。

また「教科との関連」という項目ではその具体的な指導として、小学校1、2年生が「生活」という科目で「野菜を育てよう」、3年生以降は「社会」と「理科」の科目で、ある程度しか指針が示されているに過ぎないということが分かりました。

この方針に基づいた教育となりますと、食に関しての「作物を育てる」こと、それについて「学ぶ」こと、そしてそれを「食べる」といった一連の過程が各々単独で進められていることとなります。さらには、その計画の推進が各学校の方針、主には学校長の判断に委ねられているとの事でした。中には、学校の伝統文化として、市に子供たちが育てた花を寄付したり、修学旅行で北海道の農家に行き実際に収穫を体験したりするといった取り組みをして成果を挙げている学校もあるとお聞きしましたが、そういった取り組みも校長先生が変わるたびに教育方針も変更され、永続的、一体的な「食育」強いては「農」学習が行われていない可能性があります。

3. 独立した「農」科目の創設とその効果

「農」科目は単独の教科として、作物について「育てる」、「学ぶ」、「食べる」という一連の学習を行うもので、学校長の裁量に抛らない「農」学習を制度化するものです。そしてこれを各学校の地域特性を活かした形で経常的、恒久的に教科の中に取り入れます。

具体的には、まず各学校が地元の生産農家との連携システムを構築し、その農家の方が定期的に農作物の育成指導にあたり、子供たちはそこで作物の生育過程、方法を学びます。これにより、子供たちは自身が住んでいる土地で生産されている作物を知ることができます。こうした経験は、将来的に地元地域、延いては浜松市に対する愛着を生むことになるのではないのでしょうか。

また、地元の生産農家で農業に精通した「年配者」の方に協力を求めることにより、地域のコミュニケーションを図ることができます。昨今、核家族化が進み、こうした世代の方との定期的な関わりが薄れている子供たちが、豊かな心を育てていく上で非常に重要な役割を果たすことになると思われまます。

この施策では、作物を育てる場所、畑をどうするかという問題があります。ある程度の敷地を有している小中学校であれば学校内に設けることもできますが、街中の学校ですとそういったスペースの確保が難しい可能性があります。

そこで、この対策としては、校舎の屋上の利用を提言いたします。首都圏では、温暖化対策の一環として企業が積極的に取り組んでおりますが、浜松市としても、ヒートアイランド現象など環境問題への対応として、浜松市内すべての小中学校において屋上を緑化し、そこを「農」科目の教室とすることで、子供たちに対し、環境に対する教育、意識付けもできることとなるのではないのでしょうか。これにつきましては、前提として、子供たちが校舎の屋上に上がることに對しての「安全性」を確保する必要がありますが、近年順次行われております校舎の耐震化工事において、この点を踏まえた設計、工事の施工を提言いたします。

4. 学校給食における食育

食育の一連の過程の中では、「食べる」事に関する教育もまた、重要な部分といえます。これについて、「農」科目の中で、子供たちが自身で生産した作物を最終的に「給食」に取り入れることも合わせて提言いたします。

自分自身が友達と一緒に成育させたものを、その友達と一緒に食べる。

これにより、子供たちは食に対し興味を持ち、それにより感謝の心、食物の大切さ、食事のマナーや食文化といった社会性を学ぶことができると考えられます。そしてそれが健康な体を作り、強いては健全な精神が培われていくことになるのではないのでしょうか。これこそが真の「食育」の目的といえます。

そこで我々は、この学校給食の現状を知る為、「食育推進計画」の所管部署である健康医療課にお話を聞きました。現在、学校給食のメニューは、栄養士の管理のもと食材の確保に余裕を持たせるために2ヶ月ほど前に決められ、突発的に用意される食材を用いての調理は難しいとの事でした。これについてもまた、新たなシステムの構築が必要となってまいります。

そこで注目すべきは「食育ボランティア養成講座」です。同課において行われているこの講座は年々参加者が増加し、その講座を受講した方たちが力を合わせ、現在では32もの団体ができ、実際に料理教室の開催や、子供たちに職に関する紙芝居や絵本の読み聞かせ等の活動を行っております。この方たちの協力を求め、子供たちの育てた作物を材料とした料理を学校給食のメニューの一部に取り入れることは可能だと思われれます。

また、この学校給食における食材の方向性につきまして、第4章提言2で詳しく後述させていただきますが、こちらも一体となって取り組めば一貫した「食育」として、効果のある結果が生まれるはずで

5. 新たな浜松市の方向性

昨今、食の安全性が問題視されております。人が生きていく上で最も重要である「食」の部分でのこの傾向は人の生存の礎を揺るがすものといえます。さらには、飽食といわれる社会でありながら、第1次産業は衰退し食料自給率の相対的数値が40%という状況は非常に矛盾した状態といえます。

前項で述べた「農」科目の創設は、単に「食育」という分野にとどまらず、成長過程で知識を得た子供たちが、近い将来自身の職業を決定すべきときにひとつの選択肢として、「就農」という可能性が広がることとなります。これにより食料自給率が向上し、近い将来懸念されている「食料危機」について、浜松市独自の対応が図れるのではないのでしょうか。

この就農につきましては、実際に農業が「職業」として成り立つための施策が必要となっておりま

学校教育から広がる輪からの提言

I) 小中学校における「農」科目の創設



提言1 農から創るコミュニティ

第2章 市民農園から広がる輪

市民農園の可能性は、キューバやロシアの例にもあるように食料自給率を大幅に改善する力をも秘めています。ここでは、「市民農園の持つ可能性」を探り、その生かし方について提言します。

1. 市民農園の機能

市民農園には、さまざまな機能があり、行政が公共投資として行う場合の根拠には、次のような役割と活用があると考えられます。

- 1) コミュニティ
- 2) 地域活性化
- 3) 教育機能の提供
- 4) 社会福祉
- 5) 余暇活動提供
- 6) 環境保全（緑と土の確保）
- 7) 防災など（防災避難地）
- 8) 保健休養場を提供
- 9) 生産緑地
- 10) 農業多様化
- 11) 資源・資産保全
- 12) 投資軽減

このように市民農園には、多くの有益な役割があります。私たちはその中から、「コミュニティ」「地域活性化」「教育機能」の3つの項目に着目しました。教育機能については、すでに第1章で採り上げましたので、ここでは「コミュニティ」と「地域活性化」について提言いたします。

2. 市民農園のコミュニティ機能

コミュニティ機能には、世代間の交流や利用している人たち同士、地域内のコミュニティ、さらに都市部と農村部の地域間コミュニティなどが考えられます。このように1人の人がいろいろなコミュニティに係わることにより、地域としての一体感やパワーが生まれてくるのではないのでしょうか。

それが、地域を発展させる底力になると考えられます。

① 世代間を越えたコミュニティ

祖父母⇄父母⇄子供⇄祖父母と年代を超えたコミュニケーションの場として世代間ギャップを埋め、生きる力や知恵を次代に継承したり、利用者間の世代を超えた交流で、核家族だけでは体験できない環境を提供したりすることができます。

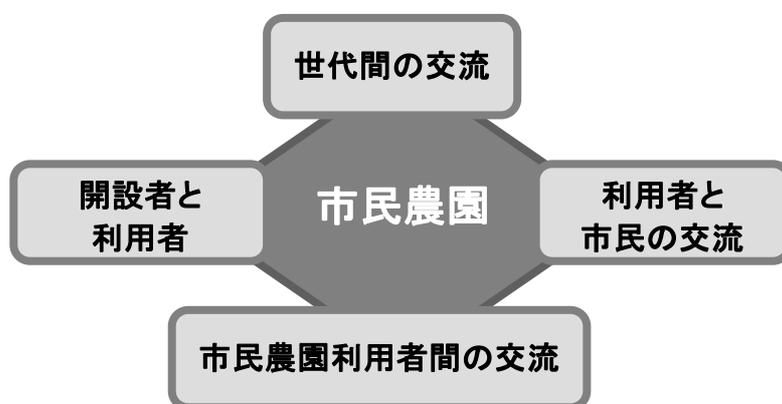
② 利用者間のコミュニティ

市民農園の利用者同士や施設開設者との間でお互いに教えあったり、分け合ったりするコミュニケーションにより、より豊かで活力ある地域社会の創造が見込めます。

③ 地域間のコミュニティ

利用者と近隣の人たちとのコミュニケーションにより豊かな地域社会の創造や安心・安全な街づくりにも期待できます。

市街地と農村部のコミュニケーションができることにより地域間交流が活発になり、将来的な農村部への定住人口の増大が期待できます。



3. 市民農園の地域活性化機能

次に地域活性化としての市民農園を考えると、3つのタイプに市民農園を分類してそれぞれの役割を考えていくことができます。

① レジャーガーデンタイプとしての都市型の市民農園

このタイプは、家の近所にあり作業の合間に近所の人とちょっと立ち話でもしたり、収穫時期には、作ったものを交換しあったりお裾分けをしたりといったコミュニケーションが生まれ、地域活性化の一助になると考えられます。

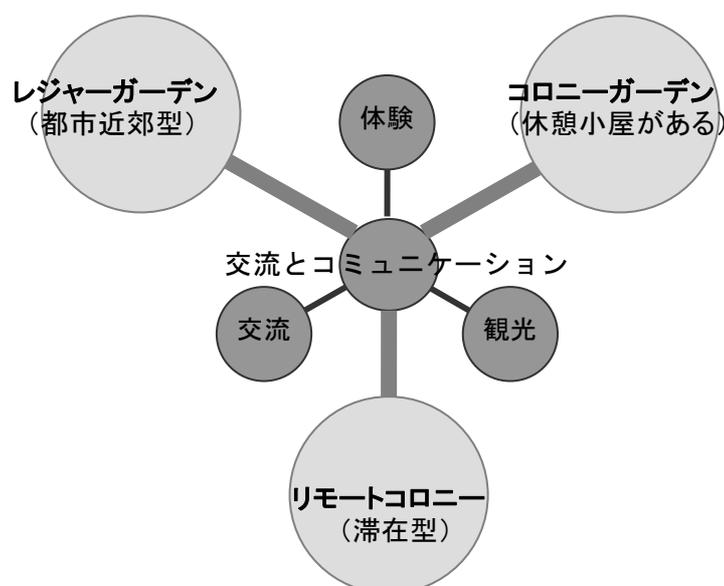
② 休憩小屋のあるコロニーガーデンタイプの市民農園

このタイプは、庭を持たない市民が菜園としてだけでなく、自分の庭として使用することにより可能性がさらに広がります。自分の庭のようにガーデニングを楽しみ素敵な庭を作る。そんなきれいな庭がたくさん並んでいるところを散策できるようにすることによって、一つの観光施設になる可能性も秘めています。

浜松市の持つ花卉の特産地としての特性の活用も期待できます。

③ リモートコロニーと呼ばれる滞在型の市民農園

最近では、地域の文化に触れる体験型の観光が人気を呼んでいます。こういった施設を利用することで、地域間の交流人口の拡大を図るとともに、定住人口の拡大にもつながっていく可能性があります。



さて、以上のように市民農園の持つ底力には、大いなる可能性があることがお分かりいただけたかと思います。

翻ってみて浜松市における市民農園の現状はどうでしょうか？

私たちが考える限りでは、必ずしもうまく機能しているとはいえません。なぜならば、

- i) 契約期間が 5 年程度と短期間のため、組織化・活性化を抑制してしまい一般市民への定着ができていない。
- ii) 行政（市）が市民農園の設立補助はしているがその後のフォローがほとんどない。

などの問題点を抱えており、キューバとロシアの例や先進地域であるヨーロッパのように都市計画として行政の中にも組み込まれ生活に根ざし市民が楽しんでいるのとは比べまだまだ改善の余地があります。

キューバとロシアの例

キューバ：食料自給率が 40%程度であったキューバは、1990 年のソ連圏の崩壊に伴い、食料の供給・化学肥料農薬の供給においても深刻な状況に陥ります。これを契機に化学肥料と農薬を使った近代的な大規模集約農業から、現在は、小規模有機農業へと転換し化学肥料や農薬を使わない安心・安全な食料の供給食料自給率 100%近くとなっている。

また、エウヘニオ・フステルというハバナの都市農業局長が、「コミュニティのためのコミュニティによるコミュニティの自給」という日本の「地産地消」のようなスローガンを呼びかけている。キューバでは、こういうスローガンで都市農業に力を入れている。

ロシア：都市生活者のうちダーチャ（ロシア版市民農園）を持っている人は一説によると 75%さらにロシア人の 10 世帯中 8 世帯は市民農園をしており、ロシアのジャガイモの 90%、果物の 77%、野菜の 73%を生産している。

提言1 さまざまなタイプの市民農園のさらなる整備推進

浜松市の「市民農園のすすめ」ホームページなかに、『市民の皆さんが土に親しみ、野菜づくりや花づくりを通して作る喜びを感じ、皆さんのふれあいの場、家族団らんの場として役立てていただけるよう、「市民農園」を整備しています。』との一文があります。

市民に身近な、都市型のレジャーガーデンタイプの整備をさらに進めるとともに、地域特性を生かしたコロニーガーデンタイプや地域間交流の活性化のためにリモートコロニータイプの市民農園の整備推進の必要性があります。

提言2 農園利用方式による市民農園への支援

いわゆる市民農園は、現在大きく分けて

- (1) 特定農地貸付法による開設
- (2) 市民農園整備促進法による開設
- (3) 農業者による農園利用方式での開設

以上3つの方式がありますが、この中で(1)及び(2)については、市(農業委員会)への申請が必要であるため行政側でも開設の把握ができますが、(3)については、農業者と利用者による「農園利用契約」の元に行われているため、全体の把握が難しい現状となっております。しかし、市民農園の約半分が農園利用方式で運営されているといわれている現状を考えると、農業者による農園利用方式についても浜松市が「市民農園設置推進要領」などの内規を定め農業者が市民農園の運営をしやすくするなどの支援の必要性があると考えます。

農園利用方式

農地を農地である状態のまま他の者に利用させる場合、いわゆる農地の賃借権や使用貸借による権利その他の使用及び収益を目的とする権利が設定されることとなる場合は、「農地法」や「特定農地貸付けに関する農地法等の特例に関する法律」(特定農地貸付法)の許可等を受けることが必要。

しかし、これらの権利の設定を伴わない方式として、農地所有者たる農業者が農園に係る農業経営を自ら行い、都市住民が農園に係る農作業の一部を行うため当該農園に入場するといった方式が考えられ、この方式は一般に「農園利用方式」と呼ばれ、農地を貸し付けるのではなく、開設者自らの農業経営の一環として農園を設置し、開設者の指導・管理のもとに、多くの農業者以外の方々のレクリエーションなどの目的のため、複数段階の農作業(植付けと収穫等)を体験させるというものである。

市民農園設置推進要領

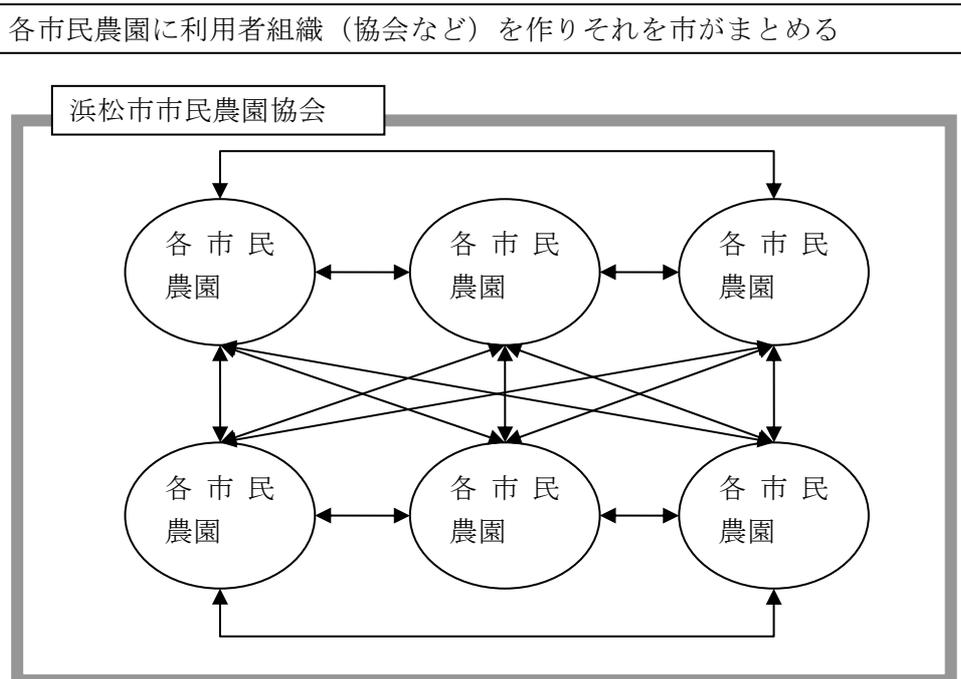
千葉県野田市では「野田市市民農園設置推進要領」を内規で定め、農園利用方式による市民農園の活用を推進している。

提言 3 利用者組織の育成

市民農園の継承・発展には「市民農園協会」などの利用者組織を設立し、組織の育成により市民農園利用者が自ら管理維持していく体制も必要性です。

このことは、利用する市民が主体的に市民農園を運営することにつながり将来的には行政側の負担軽減にもつながっていきます。

そのためには、現在の市民農園利用者の現状をしっかりと把握しオープンな形で市民農園が発展していくのを下支えしていただきたいと考えます。



市民農園間も、連携してコミュニティと地域連携に活力を与える

市民農園から広がる輪からの提言

- I) さまざまなタイプの市民農園のさらなる整備推進
- II) 農園利用方式による市民農園への支援
- III) 利用者組織の育成

提言1 農から創るコミュニティ

第3章 市民農業大学から広がる輪

前章まで、教育・市民農園を通じた浜松市にとっての農業の重要性・可能性を記載してきたが、ここでは、農業に従事する人材育成・人材教育の必要性を提言したい。具体的には、「浜松市市民農業大学の設置」について提言します。

1. 人材育成・教育の必要性

3つ（浜松市・浜松市民・農家）の視点で考えていきます。

① 浜松市の視点から

浜松市は、平成17年4月に浜松市農村計画を制定しています。その中で、浜松市は、以下に示す内容からも分かるように、農業の高齢者対策つまりは農業従事者を拡大させることの必要性を指摘しています。しかしながら、農業従事者拡大の為の積極的な具体策を行っているかという点、計画からは見て取ることができません。

浜松市農村計画（平成17年4月制定）

基本理念

「農が奏でる人と自然のハーモニーを未来に」

基本方針

- (1) 自然環境の保全・改善・復元
- (2) 農村景観の保全と形成
- (3) 歴史と文化の継承と活用
- (4) 地域に対する住民意識の高揚

- ・この基本理念は、「農」の持つ生産・環境保全などの機能が十分に発揮され、「人」と「自然」が共有できる環境づくりを目指している。
- ・この基本計画を推進する為の施策として、次の4つを掲げている。

- (1) 行政内の推進体制の確立
- (2) 地域住民の理解と協力
- (3) 地域環境とふれあう学習教育、生涯学習
- (4) 良好な農村環境の継承

特に（４）良好な農村環境の継承の項目に注視したい。

この推進内容として、「少子高齢化や都市部への転出によって農村部の人口が減少傾向にある中で、地域住民と共に農村の過疎化対策を進める必要があります。都市部の住民の農業、農村への関心の高まりという新たな兆しを受けて「農村で暮らすスタイル」を広く発進すると共に、「グリーン・ツーリズム」などによる都市部との交流で“交流人口”の増大を図るなど、今後の農業、農村の活性化を進める工夫を地域住民と考えていく必要がある」と記載されています。

② 市民の視点から

前章でも、述べたとおり、浜松市の中に市民農園が増加している現状があります。これは、浜松市が遊休農地の有効活用を図るため、市民ふれあい農園の拡大のために補助金等を交付していることによる効果もあると考えられます。また、市民農園が出来ると、多くの市民がその利用をしていることから分かるように、市民の間に農業の興味が拡大していることも分かります。但し、この市民は農業の素人であり、農業の知識を求めているのではないのでしょうか？また、農業知識の習得の場を用意してあげることが、より一層の市民農園、農業従事者の拡大につながると考えます。

③ 農家の視点から

今度は農家の視点から見てみましょう。
前述してきた通り、農家の高齢化は大変大きな社会問題となっており、農地はあるが、農業に従事できる人が減ってきている現状があります。農家にとっては、農業を手伝ってくれる人（援農）が必要なのです。また、ある程度の農業知識を持っている方が、援農に来てくれるのを望むでありましょう。そして、一番の課題として、農家にとって、援農してくれる人の募集体制が無いことがあげられます。



2. 市民農業大学とは

上述してきたとおり、市は「農業従事者拡大の必要性」を考えています。市民には、「農業への興味の広がり、農業の知識への欲求」が見て取れます。また、農家は、「新しい農業従事者が必要」となっています。そこで、市民農業大学の設置を提言いたします。

市民農業大学は、いくつかの自治体（横浜市・旭川市）で行なわれていますが、ここでは、実際に取材を行なった横浜市の市民農業大学の内容を説明します。

<横浜市の市民農業大学講座 平成9年より開始>

- 目的：農家担い手不足の解消、農地保全
- 場所：横浜市環境活動支援センター（横浜市保土ヶ谷区内）
隣接する「こども植物園等」も含めトータル6ヘクタール
- 講師：市の職員、農家
- 期間：2年間（1年目：実習中心（木曜日開催）、2年目：農家にて）
- 回数：年20回程度
- 受講料：10,000円程度／年 受講生負担
- 修了者：横浜市より「農体験リーダー」と認定され、市の斡旋により農家へのお手伝い（有償）を行なう。また、修了生が中心となり、「はま農楽（のうら）」という自主活動組織がある。

※「はま農楽」とは

修了生（農体験リーダー）の中で、さらに農家での援農や農地保全等の活動に積極的に取り組んでいくことを目的に平成14年3月に発足。農家から人手の需要の情報を入手し、必要なところへ、農体験リーダーを派遣している。H20.12末で200名強が在籍。



※実際の実習風景



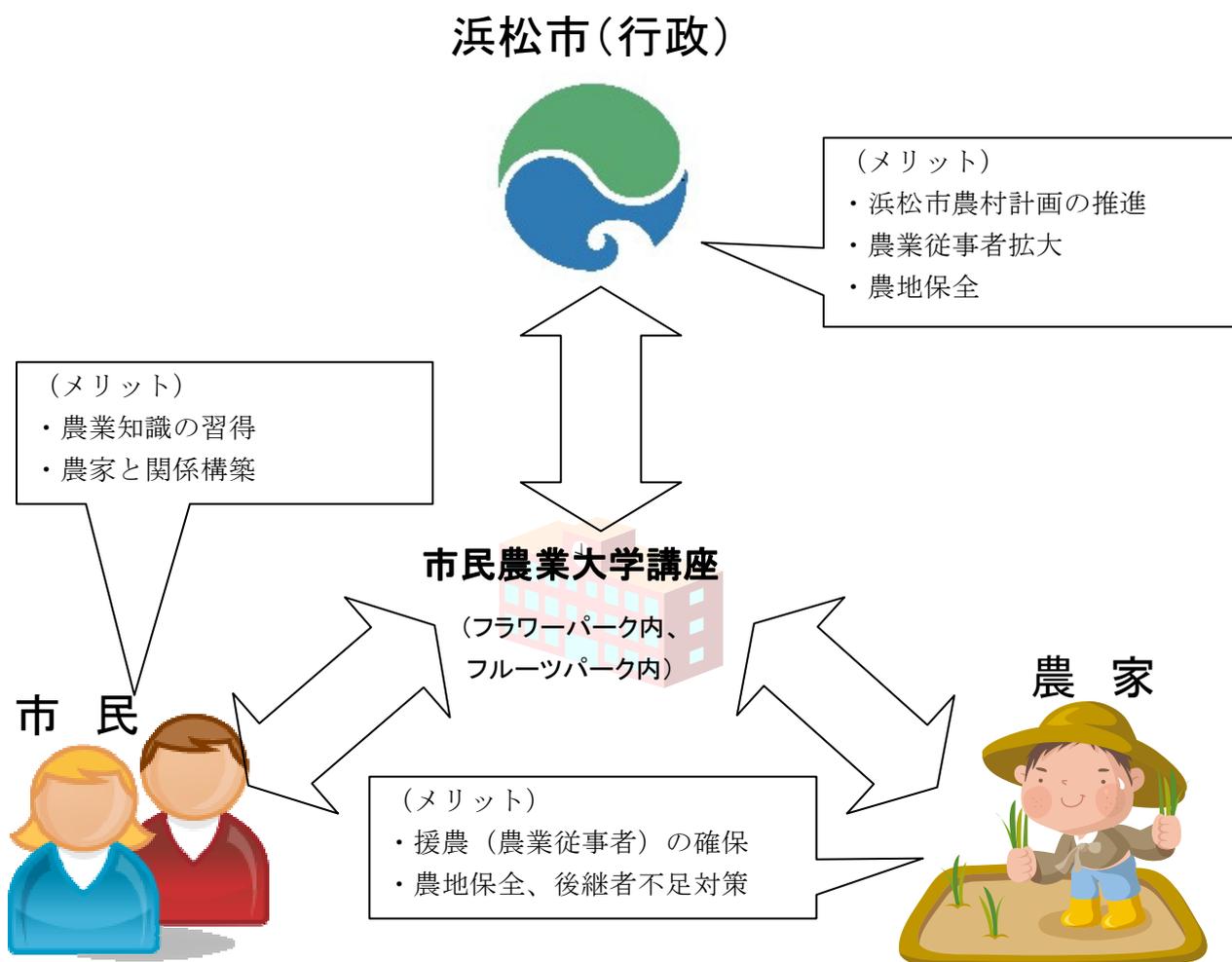
以上のような内容で、市民農業大学を設置することで、農業従事者を増やすことにもつながっており、市・市民・農家にとって大きな役割を果たしていることが分かります。ただ、平日開催の為、参加者の平均年齢が高齢者に偏ってしまう等の課題もあります。また、実習で作った農作物を直売所で販売することにより、地域市民との交流も図っています。

提言 浜松市版市民農業大学の設置

改めて、浜松市版市民農業大学の設置を提言いたします。

目的・実施方法は、横浜市の内容を参考にすれば良いと考えます。但し、実際に農作物の栽培が出来るよう農地と隣接している必要があることから、浜松市では、「フラワーパーク」や「フルーツパーク」での実施を提言します。その2ヶ所であれば、土日開催といった市民全員が参加しやすい環境が出来る。また、横浜市の「はま農楽」で行なわれているような、農家から、人手不足の情報を吸い上げ、大学修了生が援農に行くシステム構築もお願いしたい。

この市民農業大学を設置することで、市・市民・農家とのコミュニケーションを生み出すことが出来ます。また、横浜市同様、農業大学で作った農作物を直売所で販売することによる市民との触れあいも期待できます。



市民農業大学から広がる輪からの提言

I) 浜松市市民農業大学の設置

提言1 農から創るコミュニティ

第4章 新しい流通から広がる輪

既存の流通からの脱却を目指し、新しい流通を模索している農家の取り組みに注目して、浜松の農業の明るい未来を実現していくために必要な「新しいコミュニティ創り」について提言します。

1. 現在の流通と農家の抱える問題

① 近くて遠い農家と消費者の関係（多すぎる流通プレイヤー）

現在の流通は、農協を中心とした出荷団体、卸売市場、仲卸、そしてスーパーと日本の農産物流通には数多くのプレイヤーが存在しています。

今日、小売りの店頭には多種多様な農作物が並ぶのは、こうした仕組みが機能しているからです。もっとも、中間流通のプレイヤーが多ければ多いほど高コストかつ複雑な構造になり、そのしわ寄せが生産者の手取りにいつている面は否めません。

② 偽装事件による信用崩壊（見えない農協の向こう側）

消費者にとっては、毎日食べる身近な野菜だが、複雑な流通の仕組みによって農協の向こう側の実際に野菜を作っている農家のことが見えにくくなっています。

このことが、偽装事件の遠因にもなっています。

③ 農家の三重苦（生活苦・後継者不足・就農者不足）

現在の流通に依存しては、農家は儲かりません。分かっているが、今さら新しいことに取り組むのは大変だ・・・これが高齢化した農家の人達の意見だ。

儲からない農業の問題は、農家の生活だけでなく後継者不足と就農者不足といった農業の将来的な問題にも関連しています。

国の施策は大規模農家・大規模流通寄り、地域に密着している中小零細農家の三重苦の解決策にはなっておらず、とどのつまり、後継者と就農者の減少問題は解決されず、年々休耕地が増えているのが現状です。

このように、中小零細農家の農業は、長く続いた農協の共選共販の平等主義と複雑、高コストの流通構造によって個性は失われ、80%以上が60歳以上という高齢化の傾向はこれからも変わらず、今後行き詰まるばかりです。

2. 新しい流通の芽

このような現状の中でも「このままではいけない、何か新しい試みはないのだろうか」と挑戦している農家の新しい取り組み《新しい流通の芽》に、注目してみました。

① 農家の儲かる場（直売所の話）

今直販の朝市が農家の間で「農家が儲かる場」として注目されている。

地元の消費者からは「新鮮なものが安く手に入るし、生産者の顔が見えるから安心」と評判です。直売所での農家の手取りは、農協などを通した市場流通に比べて倍も違う「農家も儲かる」。地元の中で生産者と消費者が双方よしで成り立っているこの直売所は全国的に広がり、新しい流通のひとつの成功事例になっています。直売所は農家と消費者や地元の人同士の交流の場としての役割も大きく、地域のコミュニティとして活躍し、浜松市でも年々増えていっています。

② 学校給食で地場産品導入（学校給食の話）

国や県の「食育」の施策を受け、浜松市では平成 18 年度 7 月「浜松市学校給食地場産品導入モデル協議会」（国の「食育推進基本計画」→県の「静岡県食育推進計画」→「学校給食地場産品導入モデル事業」の一環）が設立されました。これにより地元の農家を作った野菜が、学校給食の食材として使われ、地元の子供達に食べてもらう機会が増え、学校給食用の野菜を作り直接給食センターに納める農家が現れました。（地場産品導入率 平成 16 年度 30% 17 年度 33% 18 年度 48% 19 年度 35%）

③ 地場農産物を使った商品加工開発（加工業者の話）

今の農家は、出荷用の見栄えだけを基準とした野菜づくりをしています。実は、農産物の流通には、もう 1 つ大きなマーケットがあります。それは見栄えより味や品質を重視した加工用農産物です。ここに注目し加工業者と業務提携をして一緒に商品作りをする農家が現れました。畑を荒らさないためだけに作っていた農家の野菜を加工業者が直接買い取っているという事例もあります。

ポイントは、農協や市場に頼らない新しい流通を作るために、農家自身が、直接販路を開拓し、農業のあり方を変えようと、努力していることです。

提言 1 市街地の直売所 … 農家と市民とのコミュニティ

まずは、直売所における農家と消費者の双方のメリットをあげます。

<農家のメリット>

- i) サイズに関わらず販売でき、包装費の節約となる。
既存の流通では規格外品となる味は変わらない大小の野菜が販売できます。
- ii) 収穫から販売までの時間が短縮でき、鮮度のよい状態で販売できる。
店に並んでいる農産物は、収穫から早くても2日は経っています。直売所ではその日の朝か昨日の夕方に収穫したものが並ぶため鮮度は抜群です。
- iii) ある程度までは農家自身が価格を決めることができる。
自分の育てた農産物の特徴やこだわり、食べ方などを直接消費者に伝えることで付加価値となり、農家自身が価格を決定できます。
- iv) 少量多品目の農産物を販売できる。
農家自身の努力や工夫が実になり、活力にもなります。

<消費者のメリット>

- i) 地元で直接顔が見られる安心安全で新鮮な農産物を買える。
生産者が販売しているので安心できます。
- ii) 普段出会えない農家の人との交流を楽しめる。
農家との交流を通じての農産物へのこだわりや苦労などが解れば、より一層食べ物への関心が高まり、感謝の気持ちも湧いてきます。
- iii) 「おまけ」や「値切る」楽しみがある。
生産者が値段を決めているから「おまけ」や「値切る」ことも自由でやりとりを楽しむこともできます。

以上のように、素晴らしい直売所だが、今の直売所は郊外にはあり、市街地にはありません。浜松は東西南北に農業が広がり、それぞれその土地にあった特産物が作られています。それを一同に集めて、市街地で定期的に販売できるような直売所があれば、そこに交流が生まれ「農業」がもっと身近なものになるのではないかと考えます。

提言2 やらまいか学校給食 … 農家と栄養士とのコミュニティ

本章2で紹介した②の取り組みは、県のモデル事業であり、単年度で終わってしまう。子供達に地元で取れた野菜を食べてもらおうという素晴らしい取り組みを今後も続けるためには、農家と栄養士とのコミュニティを継続させることが必要となるが、さらにより一層学校給食への地場産品の導入を推進していくための「やらまいか学校給食」を提言します。

《やらまいか学校給食のポイントは献立表の決め方にある！！》

浜松市学校給食地場産品導入協議会は食育を含め全体の調整の役目をしながら、実際に献立を作成する献立作成者と食材を作っている生産者が流通業者を挟まずに直接的な情報交換に比重を置きます。

- i) 品目ごとの部会（仮称：地場農産物生産者〇〇品目部会）を作る。
生産者は品目ごとに必要な規模に纏ります。
- ii) 部会ごとに献立作成者と年間スケジュールを話し合う協議会を作る。
品目ごとの年間スケジュールの話し合いでは具体的に・・・
 - 生産者から献立作成者への提案
「この時期にこの品目がこの数量でこの単価なら作れますか？」
 - 献立作成者から生産者団体（流通業者ではない）への具体的な注文
「この時期に、この品目を、この数量で、この単価なら使えますか？」というような双方の条件を協議した中で地場産農産物を使用した献立をひとつひとつ年間スケジュールの中に組み込んでいきます。
- iii) 作付けから収穫まで生育状況など部会が献立作成者と情報交換する連絡会を作る。
作付けや生育状況の情報を集約して献立作者に報告し、献立作成者は生産者からの情報をもとに品目ごとの収穫に合わせて献立を作成します。
- iv) 献立が決まってから物流の調整を流通業者や加工業者とする
浜松市学校給食地場産品導入協議会は献立に対しての加工や物流について調整をします。

学校給食は、地元農家にとっても大きな販路であり、安定した収入源にもなります。ということは、浜松の農業の明るい未来を実現していくために後継者不足と就農者不足といった農業の将来的な問題を解決する一助となる可能性を秘めています。

提言3 加工流通型の農業 … 農家と加工業者とのコミュニティ

今消費者は安心安全に注目しています。

特に産地には敏感で、食材を取り扱う加工業者、飲食店は国産原料の特に地産地消の食材を使用することを求められ、地元食材の調達を試みています。

しかし消費者にとっては安さも大事であり、海外からの輸入品との内外価格差は依然として大きく、地元食材が流通する上で障害となっています。

ここでも学校給食と同じコストの問題が生じているため、農家と連携して生産や加工、物流など流通を実現するべく意見交換をする場が必要です。

生産者と加工業者のコミュニティが整備され、コストの問題が解消することができれば、地元で収穫した農産物で作った商品やメニュー、お弁当や企業の社内給食などは、市民に広く受け入れます。

地元の食材を中心とした農家、加工業者、飲食店のコミュニティの場ができれば消費者にとって食べる楽しみが増えるとともに、地元食材で作ったものが浜松市の新たな魅力になります。

また、市場流通が減退する中で、何を作って良いのかわからない農家もいる中、地元で安心安全な農産物を仕入れたい加工業者が、意見交換しマッチングできるようなコミュニティがあれば、浜松発のいろいろな商品が、もっと作られると考えます。

<利点>

- i) これらの新しい地産地消流通が地域に広がることで、消費者にとっても地元農家で作った新鮮な農産物を直接買えることが何よりの安心安全である。
- ii) 農産物を扱う人々にとっても農家からの情報は新鮮でアイデア創造の貴重な機会である。
- iii) 農家にとっては地場製品の流通量が増え、農家の根本問題である収益の改善と問題解決になる。

<問題点>

- i) 農業の将来のことも含めて考えると、これからの地元の食を支える若手農家の育成が急務である。
- ii) 自立経営させるためには農産物をつくるだけでなくコスト意識や情報発信など農家自身が勉強しなければならない。
- iii) 農家にとって大きな課題は、生産主力を農協規格品から加工用規格品へ転換する生産改革である。

3. 浜松市の未来の農のために

この新しい地産地消流通にも弱点はあります。

i) 安定供給に対する天候不順のリスク

この問題を解決していくためには、集荷能力のある市場と連携しながら柔軟に対応していく必要があります。

ii) 仕入れ側のコスト問題

流通過程で関わる加工業者、調理人、栄養士などと一緒に連携しながら進めていくことで無駄を省きコストを削減し、さらに、供給側は地産地消流通に賛同する農家を増やし、安定供給ができる技術開発と体制作りを進めていく必要があります。

これらの問題を解決し地産地消流通の整備をしていけば活動の輪の大きく広がり、浜松市は日本全国でもトップクラスの地場産率を誇る地産地消推進都市になれる可能性が充分にあります。

この新しい流通を広げ浜松市の農業の明るい未来を実現していくためには、啓蒙的活動やそれぞれの立場の理解を深めるための機会が必要で、まとめ役として市に期待するところは大きいです。

これまでは近くて遠かった地元の農と食に関わる人々（消費者、栄養士、加工業者、調理師など）と農家が、直接交流することで新しいコミュニティが生まれ、今までになかった新しい地産地消の流通がはじまります！

新しい流通から広がる輪からの提言

I) 市街地の直売所

II) やらまいか学校給食

III) 加工流通型の農業



提言1 農から創るコミュニティ

第5章 農の底力から広がる輪

農には、それと関わりを持つ人を幸せにする「特別な力」があるのではないか。農をきっかけに人々が集まる場を作り上げた青年の事例を参考とし、新しい「人の出会い」や「ふれあい」の可能性を展望しながら、農のある街づくりについて提言します。

1. 休農地の活用

現在日本の農業は、農業従事者の高齢化、後継者不足、新規就農者の減少等、さまざまな問題を抱えています。これは浜松においても他所事ではありません。こうした問題を背景として、遊休農地が増加の一途を辿っています（次ページ参照）。

農地は「農の源」となる貴重な資源です。

その一方で、一度荒らしてしまうと、元に戻すことが非常に困難であるという特質があります。この点が重要です。

遊休農地を減少させるには

- i) 学校教育を契機とした農業への就職選択者の増加
- ii) 新しい流通システムの構築による農業収入の改革の他、
- iii) 政府・地方自治体の多角的な支援施策等

によって、農業の魅力そのものを高めることが大切です。

しかし、これには時間がかかります。

遊休農地を減少させるためには、政策的な寛容をもって、「業としての」農に限定せず、幅広く「農資源の活用場」として、農地を捉え直すことが必要ではないでしょうか。

ここでは、遊休農地を活用し、魅力ある浜松市の「コミュニティの場」として提供していくことを提言します。

[遊休農地等及び活用農地の所在地等]

地 域	遊休農地等	うち遊休農地に なる可能性のある農地		要活用農地
		うち遊休農地		
浜松地域	5, 432 ha (程度)	522 ha (程度)	4, 910 ha (程度)	5, 432 ha (程度)
浜北地域	1, 512 ha (程度)	51 ha ¹ (程度)	474 ha (程度)	525 ha (程度)
天竜地域	525 ha (程度)	51 ha (程度)	474 ha (程度)	525 ha (程度)
舞阪地域	16 ha (程度)	0 ha (程度)	16 ha (程度)	16 ha (程度)
雄踏地域	235 ha (程度)	14 ha (程度)	221 ha (程度)	235 ha (程度)
細江地域	986 ha (程度)	90 ha (程度)	896 ha (程度)	986 ha (程度)
引佐地域	875 ha (程度)	91 ha (程度)	784 ha (程度)	875 ha (程度)
三ヶ日地域	1, 397 ha (程度)	60 ha (程度)	1, 337 ha (程度)	1, 397 ha (程度)
春野地域	549 ha (程度)	39 ha (程度)	510 ha (程度)	549 ha (程度)
佐久間地域	271 ha (程度)	29 ha (程度)	242 ha (程度)	271 ha (程度)
水窪地域	170 ha (程度)	36 ha (程度)	134 ha (程度)	170 ha (程度)
龍山地域	147 ha (程度)	8 ha (程度)	139 ha (程度)	147 ha (程度)
計	ha 12, 115	ha 1, 087	ha 11, 028	ha 12, 115

① ひまわり 2525 プロジェクト

ひまわりの花でいっぱい！ 太陽のようなひまわりで街を元気にしたいんだ！



他県から浜松に移り住んできた塩崎明子（旧姓三島）さんは、この思いを胸に、たった一人でこのプロジェクトを始めました。



静岡新聞 7月31日掲載

まずひまわりを植える場所はないかと、浜松市役所に相談に行ったところ、「農家資格がないので農地の斡旋はできない。しかし、馬込川の河川敷に整備前の場所があるからそこを使ってみては？」と返事ともらい、本格的にプロジェクトがスタートしました。

知り合いのいないこの町で、彼女はインターネットのHPを通して同志を募り、一人、また一人と参加人数を増やしていきました（メンバーは現在約25人）。

河川敷でのひまわり畑を成功させたのを機に、飯田町・米津町と知人の紹介で畑を借りることができ、現在は3カ所でひまわり畑から一般作物まで幅広く栽培しているそうです。2008年の夏には米津町約300坪の土地で3万本ものひまわりを咲かせることに成功し、3000人もの見学者が訪れました。

以下の点に着目しました。

- i) 雑草との格闘等、汗を流して土と触れ合うことで、多くの学びと楽しみを得た。
- ii) こういうことをやりたかった人が多かった。多くの若者が仲間に。
- iii) ひまわりを見に来た人達（近所の人から県外の人まで）との交流が生まれた。

農という社会資源を活用してコミュニティを作り上げられた、素晴らしい実践事例だと思われませんが、代表の三島さんお話しを伺ったところ、こういった活動を続けて行くにはいくつかの問題点があるそうです。

- i) 畑を借り、耕作し、販売をするには農家資格が必要。
現在は農家資格所持者から畑を借り、指導を受けて活動しています。
- ii) 新たに耕作する農地を探すことに苦心。
現在は知人の紹介で遊休農地を把握している方に農地を紹介してもらいました。
- iii) 耕作について専門知識のある人がいない。
現在は農家の方より指導を受けているが、専門外のこともあります。
- iv) 農機具が必要な場合に何処で借りればよいか分からない。
現在は農家の方より借りているがすべて揃っている訳ではありません。
- v) 耕作に参加する人数の確保。
現在はコアメンバー15人位、一般参加者10名位でやっています。
- vi) 活動を続けて行く費用の確保。
現在はメンバーから会費として一人1000円、見学者の募金、浜松市から肥料等の現物補助でやっています。

上記のような問題を軽減するのに、多額の費用がかかるわけではありません。浜松市が政策として、発想の転換と、ちょっとした支援を行なうことが有効かと思われます。

例えば情報面での支援は大いに有効です。

やりたい人がいるのです。応援したい人もいるのです。ただ、潜在的である両者に訴え、励まし、結びつけることが重要なのです。

ただ闇雲に遊休農地に植え付けをすれば良いということでもありません。

浜松市が管理している非耕作地の情報を開示し、花の季節毎、土壌の性質毎に、計画的に地域ごとのプランを立てることを支援できないでしょうか。

「花いっぱいの花畑」があると知れば、人は集まってきます。浜松市民はもちろん、他市町村、県外からも花を楽しむ方が訪問するでしょう。（近隣では浅羽町町おこし協会がやっているコスモス畑の例もあります。）

浜松市にはガーベラをはじめ、全国的に生産高の高い花卉も多数あります。市民の力を活用し、こういった「花いっぱい・人いっぱい」の活動を公式Webサイトや浜松だいすきネットなどの観光案内トップページで紹介し、発展的に広げることができれば、浜松の花卉という宝物を、日本に誇る市民の文化に高めていける可能性があります。そのためにも、浜松市が主体的に、団体との連携を図り、花卉の町浜松をアピールしていくことが重要です。

一緒に耕作する人に広がる輪、それを応援する人に広がる輪、さらにそこを訪れる人に広がる輪ができることでしょう。これは、遊休農地を活用するばかりか、農という資源を活かして、心豊かなまちづくりを行なえるという、一石二鳥の取り組みです。

② 就農希望者・ニート対策

農業従事者の減少はなにも浜松市だけではなく全国的に広がっています。

就農者の減少の理由はいくつかあるだろうが、そのなかで就農というものを理解する場があまりない事に注目しました。

畑や田んぼで作業している姿はよく目にするはずですが、しかし、企業としてやっているところが少なく、一般企業のように、高卒、大卒で初任給いくらという明確な数字がありません。農家というものは就業した時点から経営者になるのです。これでは学生達が農業を職業の選択肢に入れることは難しいでしょう。

そこで、浜松市としては、遊休農地を利用して就農希望者等に就農というものを教えてくれる農家や農業法人等に対して、若手育成の助成金を出し、サラリーマン感覚で就農できる環境を整備することを提言します。

農業というものに興味をもっている人が、就農に先ず挫折感を味わうのが、安定した収益が上がるようになるまでの2～3年に必要となる貯蓄額を聞いたときだと聞いております。

浜松の次世代の農業を考える上で、若手育成という分野を抜きにしては語れません。まずは、就農というものを理解する場を農家の方や第4章で述べた市民農業大学などの卒業生などの協力を得て、機会の増大に努めていきます。

これによって次世代の農業従事者の輪が広がります。

③ 子供達

昨今、子供達の遊び場が減ってきています。子供達はなにもゲームが楽しいからやっているわけではありません。外に魅力のある遊び場がないだけです。最近では田んぼや畑に入ると農家の方から怒られるという話をよく聞きます。農家の方にしてみれば自分の作っている作物を守る為のことだと思いますが、子供達が虫を捕まえたり、花を摘んだりする場がないというのは悲しいことです。

そこで遊休農地を使って子供達の遊び場を提供してはどうでしょうか。

浜松市の管理の下、整備された公園ではなく、自然が残る遊び場を作ることによって広がる輪があると考えます。

以上3つの遊休農地の活用を考えた中で必要となるのは、浜松市民がもっと手軽に利用出来るようなシステム創りだと考えます。

そこで浜松市には農業データベースの創設を提言します。

- i) 遊休農地のデータ
- ii) 農業指導をしてくれる人
- iii) 農機具を貸してくれる人
- iv) 農作業のボランティアに参加したい人
- v) ボランティア活動に協力したい人
- vi) このような活動のデータ

これらのデータベースを利用して、遊休農地の活用をすることで、町の活性化、農業の活性化がされ、そこから市民、その他の人との広がっていく輪があるのではないのでしょうか。

2. 農家民宿の積極的な推進

現代では自分で作物を作り、収穫する機会が極減している。特に都市部に生まれ育った人の中には、食卓に並ぶ物がどのようなところで採れ、どんなものなのかも知らずに食している人も少なくないでしょう。

それに現代では、都市住民等が農山村を訪れ、豊かな自然や美しい景観、美味しい郷土料理を食べ、人々と交流するグリーン・ツーリズム（都市農村交流）という事に関心が高まっています。

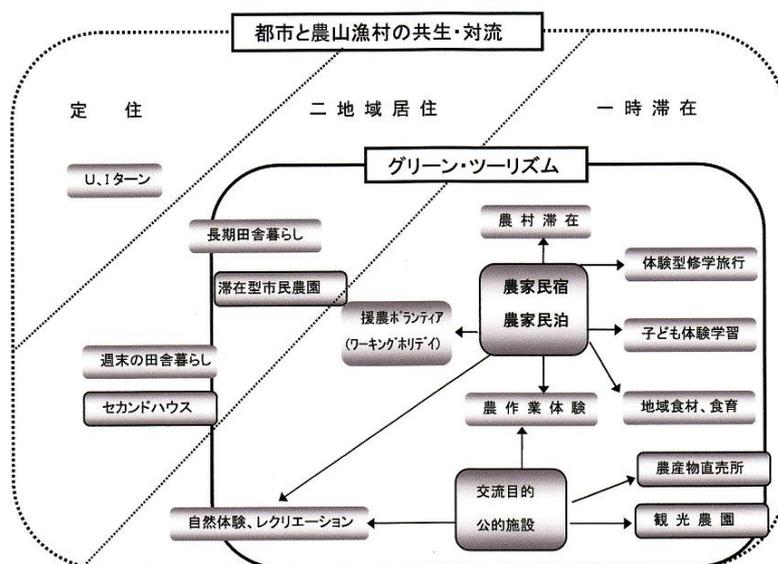
浜松市は北には自然豊かな山、西に浜名湖、南には遠州灘、東には天竜川と環境的には恵まれております。このような宝物をうまく活用できる環境整備を検討します。

浜松市の学校の中には、修学旅行を兼ね、一般農家のお宅に宿泊して、農業体験などを行っている学校もあると聞きます。第1章でも述べた学校教育と組み合わせて、浜松市内での農業民宿への宿泊が出来るのではないのでしょうか。

すでにある観光農園や、農産物直売所、自然体験の場などはよいとして、宿泊型の農家民宿は浜松市ではあまり聞き覚えがありません。一緒に生活することで得られる気付きや癒しもあるはずです。新潟県・長野県・秋田県など農家民宿を積極的に推進、支援している県・市町村もあります。

浜松市として、グリーン・ツーリズムのニーズに応えるべきシステム構築の一環として、農家民宿の積極的な推進を提言します。

都市住民との交流の場、子供達への教育の場、遊び場、市民の心の癒し場をとって広がっていく輪があるのではないのでしょうか。



農の底力から広がる輪からの提言

- I) 農業データバンクの創設
- II) 農家民宿の積極的な推進



浜松YEG版コンパクトシティ

◆ 浜松 YEG 版コンパクトシティ 提言にあたり

1. 着眼点 ～住環境が豊かな浜松～

戦後、浜松は、高度経済成長の中、楽器やオートバイ等の産業がめざましく発達し、物質的に豊かな生活が送れる街に成長を遂げて来ましたが、現在未だかつてない大きな社会環境の変化が起き、多くの課題が発生してきています。

急激に進む高齢化・少子化は浜松においても例外ではありません。それに伴う近所づきあいの減少、中小商店街の衰退、交通事故ワースト1、治安の悪化…これら市民生活の悪化は、残念ながら統計上も明らかです（安全なまちランク全国676位/全国806市区中：都市データパックの数値）。

折りしも、千葉県東金市の生活道路の片隅で少女殺害事件が起き、浜松でもお年寄りが気軽に立ち寄る郵便への強盗事件が頻発し、生活拠点の安心・安全を脅かす象徴的な事件が、他の地方都市だけに限らず、ここ浜松でも発生しているのが現実です。



中日新聞 平成20年9月22日朝刊

中日新聞 平成20年6月3日 朝刊

では、私たちの街・浜松はどんな街なのでしょう？

製造品出荷額27,533億円（全国8位）・農業産出額524.1億円（全国5位）と農商工のバランスの取れた産業都市であり、気候が温暖で、国際的なピアノコンクールやオペラコンクールが開催されるほど文化活動が盛んで、新幹線により直接首都圏や関西圏と繋がる交通の要所で、浜松祭りを始めとする祭りの輪があり、大変住環境が豊かであると言えるのではないのでしょうか。つまり、人が心豊かに暮らしていく要素にあふれていることと言い換えることができます。

そこで、私たちは、この豊かさを守り、もっと暮らしの中で活かしていないのかを出発点に考え始めました。

そして、その豊かさとは、日々私たちが生活している「生活拠点」を発想の中心におくことで、見えてくるものだと考えました。

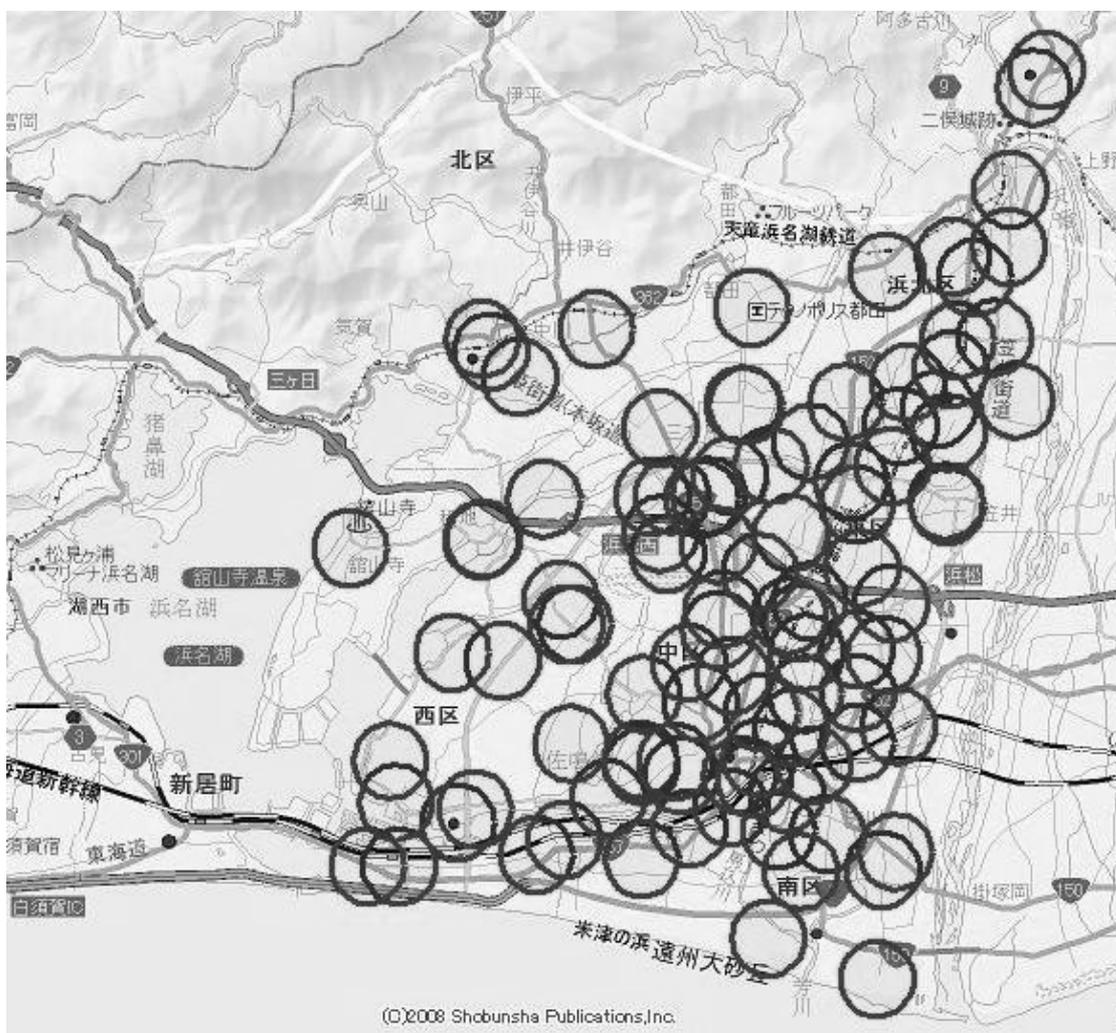
2. 踏まえるべき課題 ～生活拠点の範囲と浜松の成り立ち～

旧浜松市やその近郊地区には約1 km毎にスーパーマーケットが点在し、そのスーパーマーケットを生活道路が繋いでいるという現実を見て取ることが出来ます。

これはとりもなおさず、浜松の生活拠点が生活道路を中心に形成され、日々の暮らしを繋いでいることを示しています。

代表的な生活拠点の形としては、生活道路に沿った楕円形なエリアをイメージしていただけだと思います。(もちろん、各生活拠点は1つとして同じ処はなく、すべてがそれぞれに特徴を持ち、過去から将来に向かって素晴らしい発展が継続的になされていくことと思います。)

尚、生活拠点を徒歩や自転車で移動可能な圏内と考えた場合、浜松においてはスーパーマーケット相互の間隔や普段の徒歩での移動の頻度を考えると、例えば、直径2 km(時速4キロで30分圏内)程度が妥当だと考えられます。この距離は、中学校の校区内で自転車での通学が許される範囲とも通じています。



スーパーマーケットを中心とした1 km圏

以下に生活拠点の具体的範囲のイメージを挙げます。

① 住宅団地＋スーパーマーケット＋学校

浜松市には、いくつかの住宅団地があります。それぞれの住宅団地の中心には、スーパーマーケットがあり、バス停があり、そして、一歩中に入ると小学校や中学校があります。郵便局や医院、美容院などもあり、働く場以外の機能が全て徒歩圏内に集まっています。



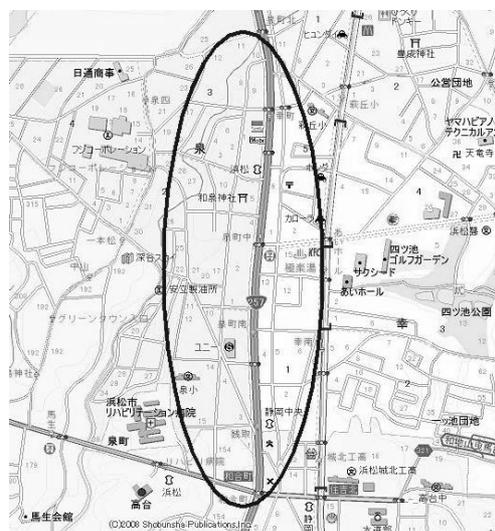
② 歴史ある古くからの生活拠点＋代々続く商店街＋他の生活拠点からの距離

旧町村の中心的生活拠点で、歴史的な神社・仏閣を中心に古くからの歴史がある場所です。その歴史に根ざして代々続く商店が店を連れ、その商店街で全ての買い物が済んでしまうだけの充実度を有しています。これは、他の生活拠点からの距離が徒歩や自転車では接続できないもので、生活要素の機能を補う連携が困難な地理的条件となっています。



③ 幹線道路＋商店街＋中規模商業施設

浜松の自動車交通の要となる道路(幹線道路)の周辺に商店が伸び、その中心的位置に中規模商業施設が位置しています。その幹線道路は、バスも多く通り中心市街地へ接続する重要な機能を果たしていますが、比較的渋滞が激しく、一見すると移動に困難地域にも思われます。しかしながら、道路が渋滞しやすいことで、近所への買い物等では車の使用が抑制され、徒歩や自転車での移動が促されています。



今の浜松市に至るまでの歴史を振り返ると、浜松は昭和の大合併や平成の大合併と、生活拠点となる町村の合併を繰り返す中で、今の政令指定都市である浜松市が形成されるに至っています。そして、今も尚、当時からの地域の核となる生活拠点が、地域の歴史・文化・風土が守られる中で、息づいています。

旧浜松市外の地域は、今までの旧町村の繋がりを大切に守り、それぞれの生活拠点で着実な暮らしの維持に励まれていることは、周知のことです。また旧浜松市においても、浜松祭りの組に代表されるように、子供・若者・実年層・お年寄りが手を携えて地域の心意気を大切にする想いは、旧浜松市外の地域に決して負ける処はありません。

以上の点を踏まえて、提言を行うこととします。

古くから守られ続ける生活拠点の集合体であるという比類希に見る特徴を有する浜松を考える上では、コンパクトシティという街づくりの考え方から生活拠点を眺めてみることに必要性を感じ、浜松らしい生活拠点に重きをおいたコンパクトシティの姿を考えます。

一般的なコンパクトシティの定義

生活要素が徒歩や自転車で移動可能な圏内に集積している地域をコンパクトシティといい、エネルギー効率・環境負荷軽減・公共サービスの効率化・都市開発の効率化・事件事故の減少、コミュニティの復活（相互扶助など）の点で効率が良い都市形態

コンパクトシティ化しやすい都市の要素

- i) コミュニティが存在していること
- ii) 中心市街地である程度文化活動が盛んであること
- iii) 公共交通網がある程度充実していること
- iv) 観光地としても成立しうる資源を持ち人々が流入する要素があること

浜松型コンパクトシティの定義 <浜松市役所都市計画部都市計画課>

市街地と農地・自然地をきめ細かに区分して共存させ、市街地の効率的な土地利用と身近で良好な自然環境の保全を図る。そして、市街地にある都心や地域の中心となる拠点間のネットワークとして公共交通によりつなぐ。各拠点では市民の様々な生活行動に応じた諸機能が集積し、角に自家用車に依存することのない、歩いて暮らせるまちが形成される。

3. 4つの柱 ～繋がる和～

私達は以下の4つの柱を立てて、「浜松 YEG 版コンパクトシティ」を提言します。

- ① 文化が繋がる和
- ② 人が繋がる和
- ③ 心が繋がる和
- ④ 歴史が繋がる和

共通するキーワードは「繋がる和」であり、それぞれの提言は相互に関連しています。そして、浜松 YEG 版コンパクトシティの定義を

わが街を愛する思いに根ざし やらまいかを街づくりに活かし 安心して触れ合える空間があり いつまでも守られ続ける生活拠点 そんな生活拠点が集まった街・浜松
--

としました。コンパクトシティの定義そのものが、時代の変化や地域の特徴を反映したものであり、日々の暮らしの中で、住環境の豊かさを実感し、その豊かさが継続されるイメージを明らかにすべきだと考えました。そしてなにより、人の和の繋がりである生活拠点に暮らす私たちの想いを市民が素直に望む内容をありのままの言葉で綴ることにより、将来のあるべき姿を明らかにしました。

提言 2 浜松 YEG 版コンパクトシティ

第 1 章 文化が繋がる和 ～わが街を愛する思いに根ざし～

地域固有の文化や風土の衰退を食い止めるため、すべての世代の市民が、わが街を愛するために、愛着ある自分の生活拠点の魅力を実感し、体感する必要があります。そのために、地域固有の文化・風土の「再発見」や地域の「物語の創出」について提言します。

1. 社会環境の変化

車社会への変化が消費の郊外化を促進し、インターネット社会の急速な発展が消費の在宅化へ向かわせ、貧富の二極化へ向かわせる格差社会が発生し、既婚率の低下に伴うファミリーになりにくいカップル減少社会が拡大した社会環境の変化は、地域の活力と経済力を衰退させ、同時に地域固有の文化・風土を衰退へ向かわせています。

一方で、不便・非効率を承知の上で多様な文化に愛着を持ち、それを保存し、人との交流、地域固有の文化・風土との触れあいを求め、更にそこから得られる心の充足を求める、いわゆるスローライフな社会実現への胎動も始まっています。

2. 地域固有の文化・風土とは

それぞれの地域には、それぞれの地域に住む人たちがおり、その人たちなりの暮らしがある。そこでしか感じられないもの、そこでしか得られないもの、そこにしかないものに囲まれながら、そこで地に足のついた暮らしの情景を昔から続けてきた、そして、これからも人がいる限り続くであろう確かな生活のかたちを地域固有の文化・風土と考えます。

3. きめ細かい生活拠点単位の取り組みが必要

例えば、中区の広さは、44.23km²あり東京ディズニーランド約55個分の広さに相当します。徒歩や自転車では簡単に移動できるような広さではなく、それぞれに古くからの歴史と物語をもった多くの生活拠点が、独自に存在しています。そして、それぞれの生活拠点が、地域固有の文化・風土を醸し出しています。そして、そんなわが街を愛する想いを強く持った市民が、それぞれに暮らしているのではないのでしょうか。

現在策定中の浜松市の都市計画マスタープランでは、7つの行政区ごとに街づくり構想をまとめて、各区の個性を生かした生活空間のあり方を考えられていますが、それぞれの地域の顔とも姿ともいえるべき、地域固有の文化・風土の色や匂いの違いを無視して枠組みを決めてしまっただけでは、本来存在すべき味わいや風味が失せてしまうと考えます。

ですので、まずは、それぞれの地域固有の文化・風土をきめ細かい生活拠点単位で味わうことから始める取り組みの必要性があると考えます。

提言 生活拠点ワークショップ

私たちは、それぞれの地域固有の文化・風土をきめ細かい生活拠点単位で味わうことから始める取り組みの必要性があると考えました。より具体的には、自治会、子供会単位等各団体での取り組みとそれぞれの団体を繋ぐ人の和での取り組みであります。

特に、世代・性別や職業を超えた人の和での取り組みが重要であると考えます。

文化とは人が繋げていかなければ、途絶えてしまうものである。繋げていくために必要となるのが、世代間の交流であると考えます。世代を超えた人の和が、文化を繋げていく和となるわけです。

その最初の取り組みとして、私たちは、都市計画マスタープランの区別構想による区民ワークショップから一歩進めた、「生活拠点ワークショップ」を提言します。

この「生活拠点ワークショップ」の中で、自分の生活拠点の魅力・特徴や課題を整理し、地区内の全ての世代の市民が豊かなコミュニケーションを図りながら各生活拠点の文化・風土の「再発見」に努めてもらいます。

そして更に、人に歴史ありではありませんが、各生活拠点にも歴史があるはずです。歴史があれば、物語があるはずです。世代間交流を奨めることによって、地域の「物語の創出」にも繋がると考えております。

文化が繋がる和からの提言

I) 生活拠点ワークショップの創設支援

提言 2 浜松 YEG 版コンパクトシティ

第 2 章 人が繋がる和 ～やらまいかを街づくりに活かし～

浜松は、昔から民間の力により地域経済が発展を遂げてきました。その民間の活力を、人々が住むそれぞれの生活拠点の街づくりにも積極的に活用していく新たな仕組み・連携について提言します。

1. 市民の自発的取り組み

高度経済成長時代以来、私たちは、地域の街づくりを行政や専門家に全てを委ねてきました。公共投資に回すことの出来る財源も十二分にあり、日本の経済発展にはインフラ整備が非常に重要な役割を担ってきました。

しかしながら、自分たちの日々暮らしていく生活拠点の基本となる街づくりを行政や専門家に依存しすぎで良いのでしょうか。

また、行政の考える市民参加は、行政の呼びかけに呼応する形での参加であり、出発点は行政であって、市民の自発的活動だと言えるものはかなり少ないようです。これは、市民の意識にも課題が多く、最終的には市民の意見を行政に陳情する処までが自分たちの役割だと考えてしまっているからかもしれません。

それぞれの生活拠点に住む市民は、自分たちが住む生活拠点を一番よく知っています。いわゆるその生活拠点における専門家です。その専門家である市民一人一人の自発的な力が結集した結晶が、生活拠点の活力を生む原動力となりうると考えます。

2. これからの街づくりは、市民が主役

自分たちの住む地域を良くしたいと立ち上がり、実際に行動に移している市民の方々がおられます。例えば、経験者のいない中、遊休農地の利活用の一つの取り組みとして「体験農園」や「共同農園」を始めた地域や地区の住環境を守っていくために、協議会を設立して整備計画を検討している地域そして、計画的な土地利用と農業環境の保全について検討を進めている地域などがあります。そんな活動をしている地域の市民を応援しているのが、浜松まちづくりセンターですが、まだまだ活動している地域は少ないようです。

浜松まちづくりセンター 浜松市中区中央一丁目 1 3 番 3 号 TEL 053-457-2616

市民の主体的活動の推進、市民参加・協働の推進のため、まちづくり活動の支援、調査・研究、まちづくりの普及・啓発、図書発行、販売及び人材育成を行っている。

3. 市民主体であることを明示するための市民へのメッセージとして

まずは次の3つの施策において、市民主体であることを鮮明に打ち出し、今後の行政の取り組み方を明らかにすることを提案します。

① 都市計画マスタープラン ～これまでに検討した内容の流れ～

現在策定が進んでいる都市計画マスタープランにおいては、その基本理念に「市民主体のまちづくり」が掲げられていますが、残念ながら理念の一番最後の5番目です。



浜松市の都市計画課のお話の端々に市民あつての街づくりという言葉が聞かれ、行政の担当の方々が日頃市民の想いを最優先に考えられていることが、とてもはっきりと伝わってきました。

この折角の想いを、しっかりと市民に伝えるためにも、是非、「市民主体のまちづくり」を基本理念の筆頭理念に据えていただきたいと思います。

② 浜松市都市計画道路の見直し ～都市計画道路の見直しの基本方針

現在、進められている都市計画道路の見直しに関しても、そのガイドラインの中でうたわれている基本方針には、市民の想いが直接反映されるような内容が表記されていません。



元来、この見直しは、社会変化の実情に合わせて市民生活の現状に則したものであるはずで、時代の要請にも従うべきです。

浜松市都市計画道路の見直しの基本方針に、市民による都市計画道路の見直しを明示していただきたいと思います。

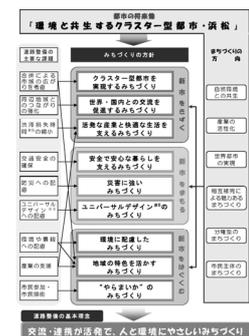
③ 「みちづくりの方針」

浜松市が定める「浜松市のみちづくり計画」の中の「みちづくりの方針」には、「“やらまいか”のみちづくり」が掲げられ、市民参加・市民協働が方針に盛り込まれています。

しかし、こちらも9つある道路整備の主要な課題の9番目、すなわち一番最後に位置づけられているにしかすぎません。

せっかく掲げられた「市民主体のまちづくり」の文字が、絵空事になってしまっていないでしょうか。

是非、「“やらまいか”のみちづくり」をみちづくりの最上位の基本理念に位置づけていただきたいと思います。



提言 やらまいか街づくりコミュニティ

第1章で提言した「生活拠点ワークショップ」を更に1歩進めて、「やらまいか街づくりコミュニティ」を各生活拠点ごとに創設し、生活拠点の幅広い立場の人たちの自発的取り組みを促していく。

このコミュニティは、以下のことを原則とする。

- ① その生活拠点に住む世代・性別を超えた人の和での協働によること。
- ② その生活拠点以外の市民との交流の推進も図ること。

①については、第1章で述べましたので、ここでは割愛させていただきます。

②につきましては、多様性に富んだ人や情報と交流することにより生まれる価値の質が高くなるからです。また、生活拠点を言い換えれば、地理的空間の共有・共通の価値観の共有とも言えるため、ともすれば閉塞感に陥りやすく、硬直化し易いためです。

このコミュニティを通じて、人と人が交流し互いに学び合うことができ、更にそれぞれの生活拠点がより暮らしやすくなるという素晴らしい人が繋がる和となるわけです。

人が繋がる和からの提言

I) やらまいか街づくりコミュニティの創設支援

提言 2 浜松 YEG 版コンパクトシティ

第 3 章 心が繋がる和 ～安心で触れ合える空間があり～

生活道路の歩行者・自転車の安全対策として国や県は、コミュニティ・ゾーン形成事業や「あんしん歩行エリア」の整備を進めています。そこで、私たちは既存の道を活用した安心で触れ合える空間としての「裏通り」の再生について提言します。

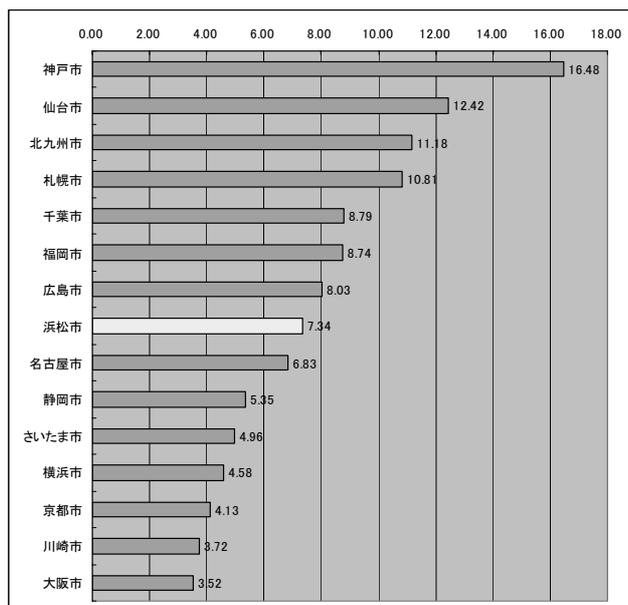
1. 裏通りの再生

生活拠点における安心で触れ合える空間の代表的な場所といえば、公園ですが、浜松は他の政令指定都市に比べ、決して公園が多い方ではありません。逆に少なめなのです。また、現在ある公園の利用状況からして、新たに公園を作っても費用が必要なばかりで、そう簡単には人が集まらないでしょう。

一方で、浜松の生活拠点は、首都圏にみられるような地下鉄や J R ・私鉄の駅を中心とする放射状の形状ではなく、生活道路を中心とした楕円形状の場所が多く存在します。本提言書 P43 の図をご覧くださいとお分かりいただけますが、旧浜松市やその近郊地区には、約 1 k m 毎にスーパーマーケットが点在し、そのスーパーマーケットを生活道路が繋いでいます。

さらに、生活拠点での交通事故の増加に伴い、生活道路の歩行者・自転車の安全対策をより積極的に進めなければならない状況にあります。

そこで、私たちが注目したのが、公園と同じ公共空間である「裏通り」です。



市民 1 人当たりの都市公園面積

2. 安心して触れ合える空間としての裏通り

安心して触れ合える空間としての裏通りとはどんな処でしょうか？

みんながワクワクする空間であり、公園等の公共空間と隣接し、車の通行が抑制され安全な、そんな市民が安心して触れ合える場と考えます。

- ① 裏通りの定義として挙げられるものは、
 - i) 生活に不可欠な様々な施設に緊密に繋がり、興味をそえられるようなルートを提供するもの。
 - ii) 建物、木々、街灯など周囲の環境に工夫を凝らし、自動車利用を減退させるような小さく細いものであることによって、徒歩や自転車の利用が促進されるようなもの。
 - iii) 公園等のオープンスペースが隣接し、住民相互のコミュニケーションの場を提供するもの。
- ② 特色ある裏通りのイメージとして、
 - i) 会話を楽しむ「社交場」としての井戸端会議の場となる裏通り
 - ii) 子供たちの「遊び場」としてのメンコやベーゴマ等を楽しめる裏通り
 - iii) 高齢者や子供達が接する「福祉の場」としての多世代がふれあえる裏通り
 - iv) 菓子を片手に歩ける「心なごむ場」としての自由奔放な裏通り



提言 裏通り再生の実施

安心で触れ合える空間としての理想の裏通りをつくるためには、それぞれの生活拠点において核となる生活道路が、その生活拠点の特徴と市民の要望を最大限に取り込んだ裏通りにすることができるか否かの十分な検証が必要になります。

このためには、予め、裏通りとして好ましい生活道路であるか否かの検証のプロセスの明確化の作業から進める必要があり、その検証の骨格づくりとして、浜松市は国や県が進めるコミュニティ・ゾーン形成事業や「あんしん歩行エリア」の整備を担当する部署として、まずは、裏通り再生担当部署の新設か併設を提言します。

そして、次の段階で、生活拠点単位で、裏通り再生協議会を組織し、市民と行政が互いに勉強を始めるところからスタートするわけです。

最終的には、各生活拠点の住民の要望の基づき、人と車のタイムシェアリングなどの交通政策や車が走りにくい道にする道路施策等を推し進めていくことによって、裏通りが人と人、心と心が繋がる和として生まれ変わります。



道路のタイムシェアリングの例



車が走りにくい道の例

心が繋がる和からの提言

I) 「裏通り」の再生

提言 2 浜松 YEG 版コンパクトシティ

第 4 章 歴史が繋がる和 ～いつまでも守られ続ける～

暮らしと自然環境が調和し、未来に向けて持続的に成長する都市とは、それぞれの生活拠点における地域固有の文化・風土や歴史ある場所・建築物を守り、それを後世に繋げていくことではないでしょうか。そこで、持続可能な生活拠点について提言します。

1. 車線数の多い道路の開通

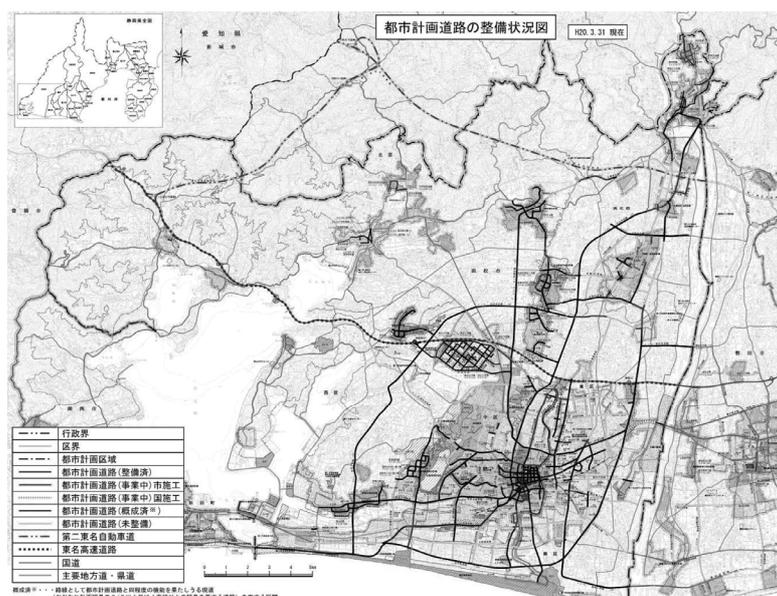
車線数の多い道路が開通することで、移動や物流の効率化を実現し、大規模ショッピングモールが多数進出し、商業施設の集積化が促進されています。

一方で、公共交通の利用が低下したり、廃業する小売店が増加するなど、歴史的に見て繋がりがあった生活拠点に断絶が発生しています。

浜松市の交通政策としては、移動や物流の効率化を図ることにより、より多くの市民の利便性が向上し快適な住環境の整備を目指しており、車線数の多い道路の開通には、道路が通過する地域の住民の賛同を得ているとの立場を取っています。

しかしながら、昔ながらの子供の遊び場であった神社のすぐ横を車線数の多い道路が通過することにより、生活拠点が大きく断絶されてしまい、地域の歴史が途絶えてしまったケースが見受けられます。せっかく長い間守られ続けてきた生活拠点が壊されてしまっているのです。この現実に対して浜松市の担当者も一応の理解を示していただいております。「向こう側には船でも渡れない」とおっしゃられていたのが、とても印象的でした。

実際には、生活拠点を断絶するような道路計画が、まだまだ存在しています。



現在の都市計画道路

2. 持続可能な生活拠点

昨今、持続可能な都市・社会・地域等が叫ばれているが、突き詰めれば、持続可能な生活拠点となり、歴史が繋がる生活拠点と言い換えることはできないだろうか。

例えば、2006年3月に公表された「東京都環境白書2006」は、“持続可能な都市を目指して”という特集テーマを取上げている。その中で、人口の80%が都市に住むヨーロッパにおいて持続可能な都市という考え方が先行的に検討されてきたこと、また、持続可能な開発の概念には環境保全のみならず経済的・社会的・文化的な側面も包含されており、仮に持続可能な都市を定義すれば“自然環境との調和を保ちつつ、省資源、省エネルギー型の社会システムの中で、安定的な経済活動が営まれ、また社会的な公平性が確保され、人々が健康で安全に、かつ快適に生活することのできる都市のこと”となるであろうことが示されている。

つまり、環境破壊や大量消費・大量廃棄等を改め、循環型の交通システム、循環型のエネルギーシステム、循環型の経済・社会システム等に移行しようということではないでしょうか。

また、欧州や米国などにおいて取り組まれている持続可能な都市づくり活動は、具体的な数値目標を設定し、その目標値と達成状況の比較、指標そのものの見直し等を行うことにより地域の持続可能性を向上させる取り組みが実施されています。

米国のサクラメント市での持続可能指標として以下のものがあります。

- i) 資源保全(埋立量、水の使用量、エネルギーの使用量等)に関する指標
- ii) 輸送/交通(公共交通機関の利用者、自家用自動車平均乗車人数、低公害車導入率等)に関する指標
- iii) 汚染防止と公衆衛生(有害廃棄物の排出量・購入量、浄化作業が必要な地下タンクの数、汚水排出量)に関する指標
- iv) コミュニティと経済の発展(学校におけるサステイナブルプログラムの開発と実施、低所得世帯向け住宅数、公共のオープンスペース、コミュニティ・ガーデンの数等)に関する指標

少しずつではありますが、日本においてもこの取り組みが始まっているようです。持続可能な生活拠点にしていくことは、歴史と歴史を繋いでいくことでもあります。過去から現在へ、そして現在から未来へ、それぞれの生活拠点における地域固有の文化・風土や歴史ある場所・建築物を守り、それを後世に繋げていくことで、歴史の和が繋がっていきます。

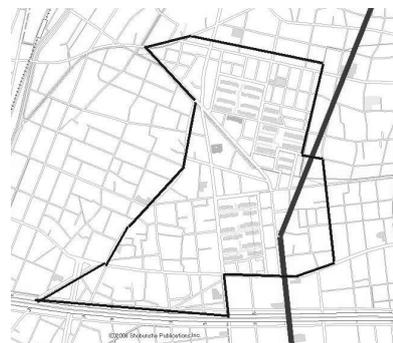
提言 1 浜松市都市計画道路の見直しに持続可能な生活拠点の視点を

現在の都市計画道路には、住宅地域や大規模集落を断絶しかねない計画が、今も残っています。計画自体が30年以上も前のもので、その後、周辺の宅地化が進み生活拠点として大きく発展している地域が多く見受けられます。

しかし、生活拠点として充実した地域に、遙か昔の計画のみを踏襲し車線数の多い道路を開通させてしまったら、いったいどうなるのでしょうか。

生活拠点のコミュニティは断絶され、高齢者や子供たちの往来が制限され、安心してバス停やスーパーマーケットに行けないようなケースも生じかねないのです。

そこで、是非、現在作成中の都市計画道路の計画見直し評価基準マニュアルに、生活拠点を守る基準の追加を提言します。



提言 2 かしこいクルマの使い方のプログラムの更なる推進

浜松市では、従来から、過度に車に依存することのない社会の実現に向けて、モビリティ・マネジメントの一環として、「かしこいクルマの使い方」のプログラムを実施してきました。具体的には、浜松市への転入者に、公共交通機関に関する資料として、バス路線図、バスの乗り方の資料、遠州鉄道の時刻表等を配布し、公共交通機関の使用の定着を促しています。また、市内の小学生に対してバスの乗り方の教室を開催し、子供たちを通して、公共交通の利用が促進されるよう取り組まれています。



しかしながら、折角効果が期待されるプログラムであるにも関わらず、非常に限定的な市民に対してしかプログラムが行われて居らず、その成果が十分に発揮されていないのが現状です。是非、現在既に行われている「かしこいクルマの使い方」のプログラムを市民活動として充実させ、過度に車に依存することのない社会の実現をそして、

“暮らしと自然環境が調和し、未来に向けて持続的に成長する浜松”を目指そうではありませんか！！

歴史が繋がる和からの提言

I) 浜松市都市計画道路の見直しに持続可能な生活拠点の視点を

II) かしこいクルマの使い方のプログラムの更なる推進

あしがき

本提言書は、市民生活のより一層の向上を目的に、《農から創るコミュニティ》と《浜松 YEG 版コンパクトシティ》をテーマとして取り上げ、“次代へのメッセージ”を検討してまいりました。そして、浜松をより良くするための“次代へのメッセージ”を【広がる輪 繋がる和】として選択しました。

輪を突き詰めていくと和となります。和の精神は、日本人が古来より培ってきた大切な精神ですが、人と人との心の繋がりが希薄になりつつある今、子が親をまた親が子を殺めてしまうなどという普通では考えられないような様々な事件が起こることは、必然的なことなのでしょう。

また、日本人は古より文化や伝統を育み、重んじてきました。この文化や伝統というものは、ともすれば遊びや無駄・非効率と思われる中にこそ存在し、人としての心の豊かさの一端を表しています。ですが、効率や生産性の向上ばかりを追い求めてばかりいる昨今は、人としての心の豊かさが、枯渇しているような出来事が多く見受けられるようになりました。

そんな時代だからこそ、この和の精神と文化・伝統を重んじる心を今一度見つめ直す必要があると考え、2つのテーマを結ぶキーワードとして人と人の交流（コミュニティ）を念頭に置き、今年度の政策提言活動を進めてまいりました。

相手のことを思い、相手に恩を施し、相手を満足させることこそが“思いやり”であり、人を大切に作る心なくしてはできない。

また、相手からの恩を受けて、恩を知り、相手の思いやりを得て満足し、感謝する。

思いやりをかける人と思いやりを受けて感動する人。

思いやりを掛け合うことで人を大切に作る心も育ちます。

このように、人から人へ、大人から子供へと思いやりを持って時代を紡いでいくことによって、真に豊かな国になるのではないのでしょうか。

【広がる輪 繋がる和】ですが、いつの世にも通じる普遍的なメッセージではありますが、だからこそ、この“次代へのメッセージ”が、地域の歴史や伝統・文化に根ざしたものと合い重なることによって、より豊かで住みよい郷土づくりに役立つものと確信致しております。

最後になりましたが、本提言書を作成するにあたり、ご多忙にも関わらず、快く取材に応じてくださり、そして大変貴重なご意見やご提案を賜りました全ての皆様に、感謝申し上げますとともに、厚く御礼申し上げます。有難うございました。

◆ 資料・参考文献等

<参考 HP>

横浜市市民農業大学 HP

<http://www.city.yokohama.jp/me/kankyounousan/shiencenter/daigakukouzabosyu.html>

はま農楽 HP

http://www18.ocn.ne.jp/~hamanora/index_hamanora.html

日本市民農園連合 HP

<http://homepage3.nifty.com/jkg-ken/>

都市データパック

<http://www.toyokeizai.net/shop/magazine/toshidata/>

コンパクトシティの計画とデザイン

<http://bookweb.kinokuniya.co.jp/>

都市計画マスタープラン策定事業について

http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/admin/finance/budget19/detail/d_75.htm

浜松市都市計画道路の見直しガイドライン

http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/lifeindex/participation/politics/public_comment/toshikei_kekka/mokuji.htm

浜松市のみちづくり計画

<http://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/lifeindex/life/traffic/roadplan/top.html>

国土交通省 コミュニティ・ゾーン形成事業

<http://www.mlit.go.jp/road/road/traffic/comzone/comtop.htm>

静岡県 生活道路を中心とした歩行者・自転車安全対策

<http://www.pref.shizuoka.jp/kensetsu/ke-230/anzen/hokousha/index.html>

モビリティ・マネジメント

<http://www.plan.cv.titech.ac.jp/fujiilab/jcomm.html>

<http://www.kkt.mlit.go.jp/mm/index.html>

持続可能な都市づくりに向けて

<http://www.ecologyexpress.jp/content/trend/20070613trend.htm>

< 参考書籍 >

浜松市教育総合計画	- はままつ 人づくり宣言 -	浜松市教育委員会
浜松市食育推進計画		浜松市
浜松市食育ボランティア活動団体		浜松市健康医療部
食に関する指導の手引き		文部科学省
日本版スローシティ	学陽書房出版	久繁哲之介著

< 取材協力 >

浜松市保健所	健康医療課		
浜松市教育委員会	こども安全課		
浜松市	農林水産課		
浜松市	交通政策課		
浜松市	都市計画課		
西部農林事務所	地域振興課		
(株)ゆめ市	代表取締役専務	徳井 厚夫 様	
ひまわり2525プロジェクト	代表	三島 明子 様	
横浜市 環境創造局 環境活動推進部	環境活動支援センター長	千野 政男 様	
	同 係長	岩崎 賢一 様	
	同 担当	下平 清孝 様	
花き生産農家 松田農園		松田 義雄 様	
2009 しずおか市民農園シンポジウム			
静岡文化芸術大学		川口 宗敏教授	

分析の前提条件	内部要因分析		
	強み (Strengths)	弱み (Weaknesses)	
<p>【都市の基本理念】</p> <p>1. 民主主義に基づく自治の実践 2. 都市の活力を高める社会関係資本の強化 3. 各地域の良さを活かす分権型都市づくり 4. 都市の成長と環境の保全が両立する持続可能な都市づくり 5. 新たな価値や人材を生み出す創造都市の確立</p> <p>【都市の将来像】</p> <p>市民協働で築く 「未来へかがやく創造都市・浜松」</p>	<p>①ものづくり産業の集積 ①世界一の楽器産業の集積 ①特色ある農林水産業 ②女性の高い就業率 ③地域の多様性が生み出す都市的活動や個性あふれる祭事・伝統芸能などの文化活動 ③地域特性に応じた特例措置の実施 ③ユニバーサルデザイン (UD) によるまちづくり ④広大な森林や天竜川、浜名湖、遠州灘などの豊かな環境資源 ⑤音楽のまちづくり ⑤海外経験を積んだ市民、経済活動を支える数多い外国人市民</p>	<p>①技術・技能者の減少と高齢化 ①企業の国内外への流出 ②少子化 (年少人口の減少) ③都市の一体性確保への対応 ③中心市街地の求心力の低下 ③中山間地における過疎化 ③大都市としての公共交通や道路網の整備不足 ③既存公共施設の維持に要するコストの増大 ④荒廃が進む森林 ④生活雑排水による猪鼻湖の水質汚濁 ④水質全国ワースト1の佐鳴湖</p>	
	<p>機会 (Opportunities)</p> <p>【トレンド】 ○経済・文化活動のグローバル化 ○環境 (循環型社会) に対する意識の高まり ○市民自治の意識の高まり ○市民ニーズの多様化・高度化 ○三遠南信地域の中心都市としての都心機能の充実 ○分権型社会の進展 ○景気の回復</p> <p>【市民ニーズ】 ○子どもを安心して育てることができるまち (子育て支援に対するニーズ、保育サービスへの高いニーズ) ○保健福祉医療が充実した安心して暮らせるまち ○防犯や防災体制がしっかりした安全なまち ○起業家や新技術が育つ産業が活発なまち ○道路網や公共交通網が充実した移動しやすい便利なまち ○ 市域の拡大に伴う市民の行政サービス低下に対する不安</p>	<p>機会×強み → 成長戦略 (強みで機会を活かす方策)</p> <p>①ものづくり アジアで一番輝くものづくり都市の形成</p> <p>③都市の一体性の確保、分権型都市、ユニバーサルデザイン くらし満足度向上計画</p> <p>④環境共生 次世代に継承する天竜川・浜名湖の自然</p> <p>⑤音楽 “音楽”の都に向けた挑戦</p> <p>⑥世界都市 世界を身近に感じる交流都市</p>	<p>機会×弱み → 改善戦略 (弱みを克服して機会を逃さない方策)</p> <p>①ものづくり (再掲) アジアで一番輝くものづくり都市の形成</p> <p>②子育て 地域力を結集して取り組む“こども第一主義”</p> <p>③都市の一体性の確保、分権型都市 くらし満足度向上計画</p>
	<p>脅威 (Threats)</p> <p>○人口減少・少子高齢化社会 ○労働人口の減少 ○ニートの増加や団塊の世代の大量退職 ○企業の国内外への流出 ○世界的な技術開発競争 ○地球温暖化などの世界的な環境破壊 ○エネルギー問題 ○国・地方公共団体の長期債務残高の増加 (厳しい財政状況) ○都市間競争の激化</p>	<p>脅威×強み → 回避戦略 (強みで脅威を克服する方策)</p> <p>①ものづくり (再掲) アジアで一番輝くものづくり都市の形成</p> <p>④環境共生 (再掲) 次世代に継承する天竜川・浜名湖の自然</p>	<p>脅威×弱み → 撤退・改善戦略 (弱みを克服して最悪の事態を招かない方策)</p> <p>②子育て (再掲) 地域力を結集して取り組む“こども第一主義”</p> <p>④環境共生 (再掲) 次世代に継承する天竜川・浜名湖の自然</p>

外部環境分析

浜松商工会議所青年部 平成 20 年度政策提言委員会

<事務局>

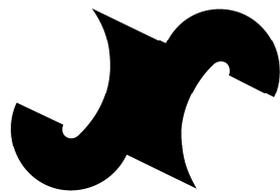
浜松商工会議所商業観光課

〒432-8501 浜松市中区東伊場 2-7-1

TEL053-452-1114 FAX053-452-6685

青年部 Email yeg@hamamatsu-cci.or.jp

青年部 HP <http://www.hyeg.jp>



YEG